

教育委員会会議の概要（令和元年7月臨時会）

- ◆ 日 時 令和元年7月16日（火）午後2時から午後6時15分まで
- ◆ 場 所 仙台市役所本庁舎 第1委員会室
- ◆ 出 席 者

教 育 長	佐々木 洋	出席
委員・教育長職務代理者	吉田 利弘	出席
委 員	加藤 道代	出席
委 員	花輪 公雄	出席
委 員	中村 尚子	出席
委 員	里村 正治	出席
委 員	阿子島 佳美	出席

◆ 会議の概要

1 開 会

2 議事録署名委員の指名 里村 委員

3 協 議 事 項

（1）令和2年度使用の仙台市立義務教育諸学校教科用図書の採択について

（教育指導課長、教育センター担当指導主事 説明）

教 育 長 本日は、11日に引き続き、小学校の教科書について取り扱うこととし、国語・書写・算数・家庭の4教科について協議を行う。

初めに国語について協議を行う。

事務局から、学習指導要領の目標等について説明をお願いする。

【国語】

教育指導課長 担当指導主事よりご説明する。

指 導 主 事 小学校国語について説明する。

小学校国語では、言葉による見方、考え方を働かせ、言語活動を通して国語で正確に理解し、適切に表現する資質能力の育成を目指している。

新しい学習指導要領では、国語に関しては3つの柱で整理された教科の目標及び内容のうち、知識及び技能では、急速に情報化が進展する社会における情報の扱い方に

関する知識・技能の育成に向け、情報の扱い方に関する事項が新設された。

また、思考力、判断力、表現力の各領域において、自分の考えを形成する学習過程を重視し、考えの形成に関する指導事項が位置付けられた。

協議会において取りまとめられた小学校国語の全発行者の特長は、別紙資料2、報告の5ページにお示ししている。

主な特長については、まずA者は「確かめよう」「考えよう」「深めよう」「広げよう」の4ステップで、児童が見通しを持ち、主体的・対話的な学習を展開できるように工夫されているということである。

次にB者は、単元のねらいが明確であり、児童が見通しを持って学べる工夫がなされているとともに、各単元末の振り返りにより学習内容の定着が図られるように工夫されているということである。

次にC者は、国語の学習の進め方が児童の具体的な言葉で示され、さらに付録「学習を広げよう」では、発展的な学習につながり、学びが深まるように工夫されているということである。

最後にD者は、その学年で身に付けたい力が示されており、児童が主体的に学習に取り組んだり、家庭との関わりを深めながら学習に取り組んだりできるように工夫されているということである。

教 育 長 ただいまの事務局の説明に対し何かご質問はあるか。

里 村 委 員 私の確認も含めて2点ほど質問させていただく。

一つは、国語の学習は、母語である日本語の力を身に付けることが目標としてあると思うが、今回の新しい学習指導要領では、この点についてどう説明があるのかという点である。

2点目は、小学校の国語ということであれば、何ととっても漢字を習得することが非常に大事だと思うが、この点、先生から見て、漢字を習得させる授業で特に気を付けていることはどんなことなのか、この2点をお尋ねしたい。

指 導 主 事 では2点、お答えする。

まず1点目、母語である日本語の力を身に付けることについてであるが、新学習指導要領では、国語について、人間としての知的な活動や文化的な活動の中核をなし、一人一人の自己形成、社会生活の向上、文化の創造と継承などに欠かせないと記されている。これは国語科が国語、日本語のことであるが、国語で理解し表現する言語能力を育成する教科であるということを示し、話したり聞いたり、書いたり、読んだりすることの元となる言葉そのものを学習対象とした重要なものであるということを示している。

もう1点、漢字の習得についてのご質問にお答えする。

漢字の習得には、学習する段階も含めて大変時間を要することから、適宜、小テストを実施して定着を図ったり、また習得が図られていない漢字についてはノートに反復練習をさせたりするなど、繰り返し指導するようにしている。また、部首とその他の部分とによって成り立っているという漢字の構成に着目させたり、例えば山という漢字は実際の山の姿を表しているなど、漢字の成り立ちに注目をさせたりすることで漢字そのものに興味を持たせながら指導するようにしている。

教 育 長 ほかにないようなので、それでは各発行者の教科書見本本にご意見いただきたい。初めに吉田委員、いかがか。

吉 田 委 員 子どもたちの立場に立ってみると、これまで日常生活で何気なく使ってきた言葉、それが勉強の対象になる、いわゆる教科学習としてスムーズに入っていける国語の授業、特に1年生のことだが、教材としての1年生の教科書のあり方ということでまず見させていただいた。

初めに、全体的なことについてである。

挿絵、絵で構成されているページが多く、スムーズに移行できるように工夫されているという感じを受けたのがA者、D者である。初めから言葉に対する意識化を図るために、挿絵をシンプルにするなどの編集の工夫をしているのがB者と感じた。子どもたちにとってなじめない拗音、拗長音、促音の扱いについて、特に一層理解を促す工夫がなされているという印象を受けたのがB者である。

次に、書くという活動についてである。平仮名を認識させる工夫という点で、平仮名の筆順は全ての者で扱っているが、漢字にも通じる上から下へ、そして左から右への一般的筆順を認識させようとしている印象を受けたのがB者である。似ている字形をそろえて平仮名に対する認識を図っているのがD者という印象を受けた。さらに、新出漢字の筆順であるが、脚注というか下段にスペースを設けて、いわゆる後ろに戻って振り返ることなく学習の効率性を考えているのがA者、B者、D者と思われた。

書くということで、まず目、そして罫線による文章の書き方を併記して2つの用紙の活用の仕方を分かりやすくしているのがB者、D者という印象を受けた。

読む活動について。説明文、物語文があるわけだが、そのレイアウトにおいて、挿絵や写真の配置に配慮され、文章に意識が向くような工夫がされていると感じたのがC者とD者であった。

続いて、他の学年も含めて、いわゆる主体的学びの促しに関することであるが、そのためには学習への見通しを持って授業に臨むことが大切と考えるので、その点で、教材の初めに単元名として学習の目標、目当てとして短文でそれを記して、それから単元の学習の見通しを持たせるような工夫がなされていると感じたのがA者、C者、D者である。そして学びの課題、学習の目的を確かに認識させるために、教材の前段に1から2ページを費やして具体的に扱っているという印象を受けたのがB者である。それから単元末ということになるだろうか、後段ではそれらを受けて、各者とも「学びのてびき」として、学びの在り方を丁寧に示している。特に各学年共通に構造化されて、学びの効率化を図っているという印象を受けたのがA者、C者である。また、教材の内容によって「学習のてびき」のパターンを変えて対応しているのがB者、D者である。

最後に、ローマ字の扱いである。多くの者が3学年で集中的に学習するよう編集されているが、4学年でも触れ、確かな定着を図ろうとしているという印象を受けたのがB者である。

教 育 長 花輪委員、いかがか。

花 輪 委 員 私なりに国語の教科をまとめると、国語は書かれている文章を読み取って理解する力、要約する力、自分の考えを書く力、話して他に伝える力などを涵養する教科であると思う。

今回4者の教科書があるが、各者それぞれ、目標を達成するため、さまざまな素材を題材に多面的な工夫をしていると思う。

以下、各者の特長的な部分をお話します。

まず、A者である。各学年2分冊の計12冊から成る教科書で、判型はB5判、これは全者共通である。1冊当たり、1年当たり五つの中くり程度のテーマの下に複数の素材を並べているのが特長である。それぞれのテーマで読む、書く、話す・聞く、のどれかに主眼を置いて力を付けることを目標としている。

各単元の後ろには「確かめよう」「考えよう」「深めよう」「広げよう」の4段階から成る学習をすることになっており、確実な習得と定着をねらっている。素材の脚注には、キャラクターによる読み取ったり考えたりするヒントが出されており、自学自習に有効である。テーマの後には、言葉や漢字、敬語などに関するコラムが設けられており、言葉の楽しさ、大事さを伝える工夫をしている。高学年の教科書では、10ないし20ページに及ぶ長文の素材を複数扱っているのも特長である。イラストが多用されており、親しみやすい雰囲気教科書に仕上がっていると思う。

次にB者である。1年から4年生まで各学年2分冊、5年と6年は1冊の計10冊の教科書から成る。各単元は「話す・聞く」「書く」「読む」の三つの力のどれに対応しているかを明記している。そして各単元の終わりには学習の観点が示されており、グループ学習あるいは自学自習もできるような構成となっている。全学年で「言葉の力」をキャッチコピーにして、表現にまつわる多様な力を付けること、それを伸ばすことに主眼を置いていることが特長である。特にノートを例示するなど、ノートのとり方の指導が詳しいのは児童にとって大変参考になると思う。

各単元の最後も含め多くの本、いずれの者も本の紹介はあるが、全ての者の中、最も多いと私は思ったが、読書に誘っているのは望ましい姿勢と言える。

次にC者である。B者と同じく1年から4年まで2分冊、5年と6年が1冊の計10冊の教科書である。各単元では素材を読ませた後、「学習」というコーナーを設けて、「とらえよう」、「ふかめよう」、「まとめよう」、「ひろげよう」の順で学習を進めることができるよう指示がしてある。さらに、その後ろに、「ふりかえろう」で、学習の到達度をチェックするコーナーも設けてある。6年生の教科書では、話し合いのノウハウを解説するなど、グループ学習を成功させるような配慮もしている。教科書のところどころには言葉のコーナーを配し、言葉に対する感性を磨くこと、語彙を豊富にすることなどを目指している教科書であると言える。

この者は、素材に日本の文化や芸能を大きく取り上げている。大変好ましいことだと思う。また、付録「学習を広げよう」では、漢字のまとめも含めて、多様な観点から参考になる資料がまとめられている。特に「本の世界を広げよう」の項目では多くの本を紹介しているのも好ましいと思う。

D者。A者と同じく各学年2冊、計12分冊の教科書である。これもA者と同じであるが、1冊当たり、1学年当たり5つ程度の大きなテーマの中に複数の素材を配置しているのが特長である。各素材には、読む、書く、話す・聞く、の三つの力のどれを伸ばすかを明示するとともに、表題の前に単元の目標を短文で示しており、あらかじめ目標を持って素材に触れることができる工夫がなされている。

各学年で、これは系統的であるが、素材の途中でのさまざまな指示は少なく、総じて構成がシンプルである。まずはじっくり素材を味わわせ、その後「学習のてびき」に沿って考えさせる構成となっている。落ち着いた雰囲気の中での国語学習をねらっているのではないだろうか。

他者との比較の問題であるが、日本に関する素材が多いのもこの者の特長であると

思う。全ての学年でイラストを多用し、教科書全体の雰囲気や和らげている効果が出ているものと思う。

教 育 長 阿子島委員、いかがか。

阿 子 島 委 員 まず、国語の目標は、日常生活に必要な国語について、その特性を理解し、人との関わりの中で伝え合う力を高めて思考力や想像力を養ったり、言葉の持つ良さを認識し、言語感覚を養ったりすることとされている。

A者は、全学年上下2冊に分冊されているので軽くて使いやすい。1年生の上巻は最後に目次があるが、1年生の下巻からほかの学年は初めに目次と、「この本で学ぶこと」として、話す・聞く、書く、読む、の内容と、言葉、漢字の広場、文化、読書の内容が説明されている。

5年生の「読む」では「新聞を読もう」と題して、新聞に書かれている内容を理解し、その後の「書く」では「情報ノートをつくろう」と続いて、新聞などから得た情報を整理することを学習している。

6年生の「話す・聞く」では「地域の防災について話し合おう」と題して、パネルディスカッションの仕方を学習し、その後の「書く」では、パネルディスカッションの様子をパンフレットにまとめて知らせるための書き方を学習するなど、1つのテーマが続いているのは分かりやすいと思う。また、「読む」ところでは「確かめよう」「考えよう」「深めよう」「広げよう」と4ステップ構造で考察するようになっているので、より内容が理解しやすいと思う。

4年生の「読む・話す」のところには点字の表も掲載されている。また、「本を読もう」や巻末では、各学年ともたくさんの本が紹介されているし、図書館利用の方法が分かりやすく解説されているのもよい。

巻末には付録がついていて、お話や「本を読もう」のほかに、3年生では電話の掛け方や「国語辞典で楽しもう」、5年生では「電子メールで伝え合おう」などが記載されている。

次に、B者である。1年生から4年生までは上下巻2冊に分冊されているが、5年生・6年生は1冊である。1年生の上巻は目次が最後に記載されているが、下巻とほかの学年は初めに目次が記載されている。また、2年生からは、国語の学習の進め方が書かれていて、1年間で学習する言葉の力、話す・聞く、書く、読む、の内容が分かりやすく説明されている。さらに、どの学年でも各所に「言葉の力」としてポイントが明記されている。

全学年の「こんな本もいっしょに」や各学年の「本棚」では、たくさんの本が紹介されており、1年生から継続して記載されている「図書館へ行こう」では、さまざまな図書館の利用方法が記載されている。

2年生の「原稿用紙の使い方」は大きく掲載されているので分かりやすい。

3年生では、国語辞典の使い方やローマ字が詳しく紹介されている。また、パラリンピックについての文章や「言葉で伝え合おう」に点字表など、様々な内容が掲載されている。

4年生では、漢字辞典の使い方が詳しく記載され、「広告を読み比べよう」は、身の回りのさまざまな文章に目を向けて表し方の違いを考えるなど、日常生活に結び付いている。また、「ふるさとの食」のところでは、宮城県の名産、笹かまぼこが掲載されているので、親しみがあってよいと思う。

5年生では「環境問題について報告しよう」と題して、資料を活用して報告する学習や、「新聞記事を読み比べよう」では、フィギュアスケートの羽生選手がオリンピックで連覇した記事や宮城MAXの記事が掲載されていて、子どもたちが関心を持って学習できるのではないかと思う。

6年生では「インターネットの投稿を読み比べよう」と題して、スポーツニュースについて掲載されている。子どもたちも利用しているインターネットについて改めて考える上でよい内容だと思う。また、最後に日本の伝統芸能が掲載されている。

全学年の巻末には1年間の振り返り、6年生には6年間の振り返りが記載されている。

次に、C者である。1年生から4年生までは上下巻2冊に分冊されているが、5・6年生は1冊である。1年生の上巻は目次が最後に記載されているが、下巻とほかの学年は初めに目次が記載されている。

また、2年生からは「国語の学びを見わたそう」と、各学年で学習することが書かれていて、1年間で学習する、話す・聞く、書く、読む、の内容が分かりやすく説明されている。1年生から図書館についていろいろと記載されており、最後に「この本、読もう」「本の世界を広げよう」では、本がたくさん紹介されている。

2年生では、観察記録の書き方が詳しく記載されており、付録の「学習を広げよう」のところでは、原稿用紙の使い方が分かりやすく記載されている。

3年生では、国語辞典の使い方や、ことわざ、故事成語、ローマ字のところが詳しく記載されている。

4年生の「パンフレットを読もう」では、身近なところでよく目にするパンフレットの見方、読み方が記載されていて、社会科でも生かせるようになっている。

5年生では古典の世界や古典芸能の世界が詳しく紹介されている。また、「学習を広げよう」に記載されている点字と手話のところでは、点字と手話のあいいうえおカードが添付されている。

6年生では「中学校へつなげよう」として、6年間の国語学習で身に付けた言葉を書き留めておくページがあり、最後に自分への表彰状を書くようになっている。

なお、2年生から6年生までには、考えや気持ちを伝える言葉や学習に用いる言葉が記載されている「言葉のたから箱」が添付されている。

最後にD者である。全学年で上下巻2冊ずつに分冊されている。1年生の上巻は目次が最後に記載されているが、下巻とほかの学年は初めに目次が記載されている。

また、2年生からは「みんなと学ぶ小学校国語の使い方」として、話す・聞く、書く、読む、の内容が分かりやすく説明されている。1年生から図書館の利用方法が説明されており、「お話がいっぱい」や「読書の部屋」では本が多数紹介されている。また、5・6年生では、なぜ本を読むのか、本の道しるべについて記載されている。2年生では、読書を広げようのところで「本の帯を作ろう」などが記載されている。

3年生では、国語辞典の使い方や百科事典の引き方が記載されている。「合図としるし」、ローマ字のところが詳しく紹介されている。

4年生では、漢字辞典の使い方や百科事典を使つての調べ方、文化の違いを調べ、文章にまとめる内容が記載されている。また、ここでも「読書に親しもう」では読書の魅力が紹介されている。さらに「安全マップを使つて話し合おう」では、通学路の安全について記載されている。

5年生では「私たちとメディア」、インターネットコミュニケーションのところで「自分の意見を持って読もう」とインターネットについて考える記載がされている。

6年生ではパネルディスカッションや電子メールでの質問の仕方が記載されている。

全学年の最後にはそれぞれの学年の振り返りと、資料編として「広げよう」「確かめよう」の中に授業で使う言葉などが記載されていて、6年生の最後には文章の種類についても掲載されている。

教 育 長 加藤委員、いかがか。

加 藤 委 員 それでは、A者からであるが、「確かめよう」「考えよう」「深めよう」「広げよう」、この4段階の提案や設問が各学年で同じ構成で、どの素材でも同じパターンで進められていくので児童に分かりやすい。「言葉を学ぼう」「言葉を増やそう」のコーナーで知識を増やす工夫もされている。どのページも落ち着いた色合いで、大変きれいである。

内容的なことを取り上げるが、例えば4年生は、論理的な思考能力が少しずつ発達していく時期ということで転換の時期になると思う。ここで出てくる説明文として、例えば4年生の「上」ではいろいろな工夫がされていた。「花を見つける手がかり」という素材であるが、その前に「ぞうの重さを量る」という、見開きで短い文章が書いてあって、そこにその文章を考える筋道のヒントがきちんと示され、説明文の読み方のモデルになっている。次の「花を見つける手がかり」という素材の長文に挑戦していく導入にすることができる、このようなステップは大変丁寧でよいと思った。

また、4年生の「下」であるが、ここで取り上げられている「身の回りの便利なものを考えよう」という素材は、大変素晴らしいと思った。まず、身の回りの便利なものを挙げる。自分にとっては特に便利ではなくても、誰かにとって便利なものがあることに気づかせる。多くの人には便利でも、立場を変えるとその仕組みのままでは不便なこともあることを知らせる。そして、同じ目的の道具がさまざまな立場の人に合わせて作られ、選べるようになっているという社会の工夫を紹介していく。ここには実際に凹凸のある点字も紹介されているので、子どもたちは実際にそれを触って調べることができる。こうした取組は、国語から発信されていても、社会科、図工のデザイン、また道徳などともつながって、学んだことを生かして身の回りを見直したり、また、ユニバーサルデザインの視点を持って町を調べて、まとめて発表するという展開へと期待できる。こうした工夫が大変いいと思った。

5・6年生が上下巻に分かれて、軽量化されているのもうれしい取り組みである。

B者では「言葉の力」を目当てとして掲げ、同時に振り返りとしても使われている。この振り返りはまた巻末にも「言葉の力」とまとめられており、その学年で学んだ、話す・聞く、書く、読むという能力を、1年間を振り返って再確認できるようになっており、体系的な学習を振り返ることができるようになっている。「言葉の広場」は、関連するいろいろな言葉をまとめて紹介しており、これもコラム的に使っていける部分だと思う。

また、話す・聞く、書く、読むというのは、この領域を常に意識させながら言葉を追求していくという国語科の本質的な視点と姿勢であり、これが随所に感じられている。

中学年、4年生を過ぎると設問の内容も表示の仕方も高度になっていき、5・6年

生は分冊ではないので、だんだん分厚く重くなっていくわけだが、学びがぐっと深まっていくのが感じられた。これも随所に言葉を伝える方法や話すことを丁寧に伝えており、現代の子どもたちを取り巻く言語環境を考えると、言葉を使った対人関係を取り結ぶ社会とのつながりが大変重要な学びになっていくと思う。

次に、C者である。単元の最初、1ページ、タイトルがあるところには必ず目当てが明示されている。「学習」というガイドのページがあり、「とらえよう」「深めよう」「まとめよう」「広げよう」に合わせて深い学びにつながっていく工夫がなされている。また、その下の段には、考えたりまとめたりするための具体的な例やノートのとり方が示されており、家庭学習や自習のポイントが分かるようになっている。説明文の読解では、まず導入として、見開き2ページで練習文がついており、ここも大変ありがたい工夫かと思う。これも見開きの短い文章の中で、説明文の文章構造について学び、その後に長文の説明文に入る工夫がなされていて、授業の中で活用できると思った。

巻末には「学習を広げよう」があり、これも大変よく考えられており、学習に活用できると思った。まず、「たいせつ」によって学習のポイントを簡潔にまとめてあり、1年間の最後には、各素材を通じて学んだことを概観して振り返ることができるようになっている。発達の段階に応じて多彩なトピックを設定しており、学習を深めているのもよく分かる。

4年生以降では、「課題の見付け方、調べ方」を設けており、1年間で学んだことに立ち返りながら問題解決学習が系統的に学習されてきたことを再確認できるようになっている。この者も、5年の点字表では実際に凹凸が感じられるように付けられていた。

また、5・6年生の「考え方を図であらわそう」のページが非常に優れていると思った。思考の整理、まとめ、視覚化について学びを広げることができる。このまま発表の力につなげることもできると思った。これは国語科の教科書であるが、「考え方を図で示そう」という思考の整理のページは、算数にも理科にも社会にも共有できるものと思う。各学年のブックガイドも豊富で、読書習慣を促進できるだろう。また、「言葉のたから箱」は児童の語彙を増やし、状態を表し説明する力を付けるのに適していると思う。

また、2年生以降は、6年生まで「季節の言葉」1から4というのがあり、これも大変素晴らしいと思った。2年生では季節の動植物、季節感を言葉で表す日本語の重要な性質を伝えている。3年生では詩と季節の暮らし、これが「季節の言葉」に載っている。4年生では旧暦や行事、5年生では古典や韻文、季語などを紹介しながらこのページが持たれている。6年生になると二十四節気の紹介と、大変格調高いページとなっている。特に5・6年生の「季節の言葉」の1から4のページについては写真が美しく、言葉がイメージを、またイメージが言葉を相互に高め合うのを実感できるように思った。

総じてこの者は、言葉、語彙にこだわった言語学習、そして美しい日本語を伝える姿勢が大変よく伝わってきた。

D者では、最初にタイトルと目当てが書かれており、本文に入っていく。学習のてびきが大変丁寧なガイドになっているように思った。「様子を詳しく書こう」という3年生のコーナーでは、伝えたいことをどのように文章にするか、組み立てを考えて

表に整理し、表をもとに文章を書く言語学習の練習がされていた。「言葉を聞き取るう」は、必要なことをしっかり聞き取る練習、そして「考えのまとめ方、広げ方」は、分類整理、まとめ、つなげて考えを広げる。KJ法という分類整理法があるが、あの考え方が上手に使われており、これもあらゆる教科につながる思考法を提示した言語学習の大事な点だと思う。また「季節の便り」は、季節感を言葉であらわす日本語の重要な性質を伝えていた。

4年生以降になってくると、文章構成上の意見の述べ方、それから根拠と理由の違い、予想される反論など、議論や主張の仕方の基本を学び、気持ちや思いを書き、自分の見方や考え方を再発見するという流れになっている。現象を記述し、他者に伝達し、自己表現としての言葉を繰り返し学ばせているという点が印象に残った。

また、5・6年生は分冊になっており、軽量化も図られていると思った。

教 育 長 中村委員、いかがか。

中 村 委 員 まず、A者である。各学年の物語の扉に、本の帯のキャッチコピーに使われるような一文、例えば6年生であれば、物語の前に「指でつくった窓に、あなたは何を写したいですか」のような一文があり、これから始まる物語への期待を持たせる工夫がある。今、本離れというものが叫ばれている中で、これはとてもよい工夫ではないかと思った。

また、各学年ともとてもゆったりした誌面で優しい色使い、そして文字もとても読みやすいフォントで、イラストも見やすい。全体を通して安心感があり、落ち着いて学習に取り組める感じがした。そして全学年、分冊になっていて、子どもたちが持ち運びしやすく、また低学年、中学年、高学年で装丁のカラーというかイメージが全く違うものになり、それぞれ美しいものとなっていて、子どもたちの興味を引くのではないかと思った。

「確かめよう」「考えよう」「深めよう」「広げよう」という4ステップで学習過程が明確になっており、子どもたちの見通しを持った学習と、主体的・対話的な学習ができるように工夫されていると思う。

付録の部分がとても充実していて、1つの単元でもよいくらいのボリュームで、子どもたちの興味を引くものになっている。年間を通じて、読書を促す資料がとても多く、特に巻末の付録には各学年でテーマを設けて本が紹介されていて、読書活動が充実できる形で工夫されていると思う。

低学年では、絵を見て、自分の言葉で文章を作るという内容の学習が多く取り入れられ、主体的・対話的な学習が低学年からできるように配慮されており、中学年、高学年では、学んだことをほかの教科に生かせるような工夫がなされていると思った。

B者である。こちらも各学年の物語に本の帯のようなキャッチコピーの一文があり、これから始まる物語への期待を持たせる工夫がされている。そして国語科での学びを「言葉の力」という、文字が目に見える形で示されており、全学年を通して統一性を持って学習ができるように工夫されていると思った。単元の初めに「言葉の力」として学習する内容が記載され、それに関係する前の学年や、例えば下であれば上で学習したことを振り返ることができる形になっていて、学びが定着するように配慮がされていると感じた。

単元末の「生かそう」では、他教科での学習や日常生活に生かす点が示されていて、学びがとても広がっていくのではないかと思う。また、キャラクターによる話し合い

の例や問い掛けなどがあり、これは子どもたちの学習のヒントになり、主体的・対話的な学習に導く工夫がなされているのではないかと思った。

C者である。こちらはことわざや伝統芸能などの教材がとても充実しており、子どもたちが興味・関心を持って学べるだろうと感じる。また、2年生からは「季節の言葉」「漢字の広場」など、日本語の良さや豊かさを伝える工夫があり、日本語を大切にしていることが伝わってきた。国語の学び方・進め方で、初めに、読む、聞く・話す、そして振り返る、学習や生活に生かす、の4ステップで行っていくことになっているが、そこを、やってみたい、話し合い、何々が分かった、何々のときに生かすことができそうなど、子どもたちの言葉で示されていて、これからの学習がどのように進められていくのか理解しやすい構造になっているのだと思う。そして、巻末のほうには点字があり、見たことがない子もたくさんいると思うので、興味を持って福祉の勉強にもなると思う。

また、「学習を広げよう」という付録の部分も充実していて、その中に「言葉のたから箱」が設定されており、さまざまな場面で使用できる多くの言葉が紹介されている。対話的な言語活動に役立つように工夫されていると思った。

D者である。単元の初めに、「学習の見通しを持とう」として、これからどのように学習が展開していくか見通しを持って取り組めるようになっており、また、活動の重点項目には、そこを色分けして、学習の焦点がはっきりと分かるように工夫されている。また、色使いも淡いもので、とても目にも優しい。そして「学習のてびき」にはキャラクターの吹き出しによるヒントがあるなど、子どもたちが主体的に学べる工夫がなされていると思う。

防災や国際理解、キャリア教育など、今日的課題に関する教材が幅広く掲載されていて、他教科とも関連付けられ、子どもたちがこれからのことを考えられるように工夫されている。そして2年生以上に「季節の便り」や「言葉で遊ぼう」など、長く親しまれてきた言葉遊びを通して言葉を介した交流ができるように工夫されているのも特長だと思った。また、グラフや表を用いて自分の言葉でまとめ、発表する活動が取り入れられていて、ほかの教科でも活用できる工夫がなされている。また、こちらの者も全学年分冊になっていて、とても扱いやすいものになっている。

教 育 長 里村委員、いかがか。

里 村 委 員 まず、A者であるが、これは協議会でも、あるいは調査研究委員会での議論と重なるが、小学校での入門期は導入単元や児童の生活や地域の実態に合った教材が取り込まれている、そして中高学年では他教科との連携ができるように工夫されている、これが特長だと思う。

もう1点、巻末の付録であるが、学年ごとにテーマを設けた本が掲載されており、読書を促す教材や資料に工夫が見られると思う。

他者も同じであるが、当者は、自主的あるいは自発的な学習が促されるように、絵や図や吹き出しに工夫が見られる。

B者であるが、B者は、児童に読書習慣を身に付けさせるというところに特長があって、随所に工夫が見られる。そして学習教材の内容が深くしっかりしていると思った。

もう一つの特長は、「思考を言語化する」という言葉を使うようであるが、考えていることを言葉に表わすということである。考えを広げて整理させるツールとしての

ノートやメモ、カード、図表が示されており、この活用を通じて表現能力の向上が期待できると思う。

具体例を挙げると、例えば4年生の下、「言葉の広場」で、人物の性格、人物の行動を表わす言葉を集めて学習するページができていて、非常にいい企画だと思う。もう一つ例を挙げると、5年生で「この言葉、あなたならどう考える」、それから「事実と考えを区別しよう」などというところまで踏み込んだ教科書になっていると思う。

C者である。C者は単元冒頭に学習活動の流れが示されており、主体的な学びを導く工夫があると思う。それから俳句を作る、あるいは竹取物語等の古典教材や民話、伝統工芸など、日本文化の素晴らしさを伝える意図を持った編集になっていると思う。合わせて、日本語に親しみが持てるよう、教材がバランスよく配置されていると思う。

もう一つは、語彙に関心を持たせて多くの言葉を習得させるねらいで、巻末に設けた「言葉のたから箱」はとてもいい企画だと思う。それから漢字の習得に力を入れた内容になっており、漢字の読み書きの学習がやりやすいと受け止めた。あわせて、植物や小鳥、小動物が描かれていて、全体的に優しい色使いになっているように思う。

D者である。D者は、特長としては、図書紹介コーナーによって読書への意欲を喚起させる工夫が見られると思う。4コマ漫画や日本文化に親しむ題材を取り入れて楽しく学習できるような工夫もなされている。巻末には、授業で使う大切な言葉がまとめられており、言語習得に役立つ、これもいい工夫がされていると思う。

もう一つの特長は、物語のおもしろさに気付いて、対話を通じて読みを深めさせようとしている意図が感じられる。全般的に、読んでいて私も好きな物語がたくさんあった。内容の構成に丁寧さを感じる。それから植物の写真などもきれいで、児童も気持ちよくこれを受け入れるのではないかと思う。温かさのある表紙も含めて色合いもとてもいいと思う。

教 育 長 各委員から各発行者の特長についてご意見をいただいたので、4者ということで若干絞り込みをしていきたいと思う。ご自身が推薦する3つの者を掲げていただき、私のほうで集計してその後の流れにつなげていきたい。

では、吉田委員から順に、3者挙げていただければと思う。

吉 田 委 員 総合的に考え、A者、B者、そしてC者である。

花 輪 委 員 私は、B者、C者、D者を推薦したいと思う。

阿 子 島 委 員 私もB者、C者、D者を推薦したいと思う。

加 藤 委 員 私は、A者、B者、C者となる。

中 村 委 員 私は、A者、B者、C者を推薦する。

里 村 委 員 私は、B、C、Dである。

教 育 長 そうすると、B者とC者が6、A者とD者が3という形になり、4者であるので、絞り込みとしては、通常であれば3者であるが、同率という部分もあるので、次の段階としてはB者とC者についてご議論いただきたいと思うが、そういう流れでよろしいか。

(異議なし)

それでは推薦の多かったB者とC者、この2者について議論を進めていきたいと思う。

B者とC者について、委員の皆さんから確認したいことがあればご自由に発言いただきたいと思うが、何か質問等はあるか。

(質疑なし)

それでは、今までのご議論を踏まえ、どの発行者の教科書がよろしいかご意見をいただき、1者に絞り込んでいきたいと思う。B者、C者の比較面でも構わないので、どなたかご意見、発言いただきたいと思う。

花輪委員 なかなか比較の表現が難しいが、B者、C者を比べてみると、ほかの委員の方のご指摘もあったと思うが、C者はかなり日本の歴史とか日本の古典、そういうものを非常に大事にして、扱う言葉もそれに類するような言葉をたくさん出している。雰囲気もほんわかとしているという印象である。

一方でB者のほうは、インターネットの題材を扱ったり、積極的に現代の課題にもトライしていこうと、その中で児童に考えさせようという、野心的というか、そういう違いがあるのかというような印象である。どちらも大変すぐれた教科書で、それぞれの教科書を使って、それぞれの教え方で児童たちに力をつけることができるだろうと思う。

強いてこの中でどっちをとるということであれば、現代的な素材をたくさん使って、国語という枠以外のいろいろな教科書にもつなげられる含みを持った素材をたくさん取り上げているとB者のほうを判断するので、私としてはB者ではいかがかなと思う。

教育長 ほかの委員の皆様方もご意見いただきたいと思う。

里村委員 世の中には二つから一つを選ぶのに本当に難しいということが実際あり、このケースもそうだと思う。6人がB者とC者を選んでいるということである。全員が両方を選んでいるということであるので非常に迷うが、例えば学校の先生方のご意見を聞いたような統計があるかと思うが、そういうご意見も参考にして方針を決めたいかと思うが、その点はいかがか。

教育長 事務局に何うが、調査研究委員会や学校の評価、そういった部分でのB者とC者の特長的なところをお話いただければと思う。

教育指導課長 B者、C者ともに共通して出されているのが、基礎的・基本的な内容の確実な習得・定着を図るという点ではいずれも非常にすぐれているといった現場の声が聞かれている。

それから、例えばB者に関しては、委員の皆様からもご指摘があったように、ノート書き方が丁寧に示されていて工夫されていると。それぞれのよいところの指摘がある。

里村委員 私の最初の質問にも関係するが、国語の授業で漢字を覚えるということが非常に大事だと思って質問した。どこの発行者もそこには力を入れていると思うが、B者は特に思考を言語化するという、漢字を覚えるということとは別のことであろう。自分で考えていることを言語化するという非常に力が注がれた内容だと思うので、学校の現場の皆さんの意見もよい評価をしていると理解した。そういう意味でB者を推したいと思う。

教育長 ほかの委員の皆様方、ご意見いただきたいと思う。

吉田委員 ここに教材として掲載されている物語文とか説明文、その他の教材についてはあくまでも手段である。なので、子どもたちがこれらの教材を通して何を学ぶのかという意識を持たせることが肝心なところだと思う。そういう点で見たとき、教材に取り掛かる前に学習の目標の意識化を図るという意味でB者がしっかりと1ページ、2ペー

ジとりながら、さらに既習事項にも触れながら編集されているのは、子どもたちにとっての学習の目安として印象付けるものがあると思う。確かにC者も「これまでの学習」という名称で振り返り等も押さえているが、その扱い方に違いがあり、その意味でB者のほうがいいという印象を今持っている。

ただ、B者にも課題があり、この在り方でいいのかというのは、学習の単元の前でそれぞれの目標を持たせるわけだが、その目標の持ち方について、余りにも丁寧に子どもたちにキャラクターを通して提案しているということがある。その辺が課題かという印象も持っている。

加藤委員 私からは逆にC者を取り上げたいと思う。確かにインターネット、現代に必要な方法・スキル、そういうものを通じて国語を学んでいくことは非常に重要であるし、現代の日本に生きる子どもたちにとっては本当に重要だと思う。しかし、技術が変わる、スキルが変わる、方法が変わっていく中であっても、何を国語から学び、国語で伝えていかなければならないのかということを考えてときに、方法だけではなく、やはり根幹、基本のところは国語の持っているまさに言葉の力だと思う。そういう意味で日本語を丁寧に伝えたいという思いについてはC者が私の中では勝っていたように思う。

教科横断的に、ほかの科目との関係の中で教科全体が進んでいくことを考えたときに、情報の伝え方、新しい情報の収集の仕方などは、他教科にも積極的に取り入れられているものかと思うので、国語でなければできないことも視野に置いておきたいという意味からC者を取り上げたいと思った。

教育長 阿子島委員、いかがか。

阿子島委員 どちらも優れた教科書なので、どちらが選ばれても差し障りはないと思う、C者のほうは日本語についてすごくそれを学ばせたいという意欲が伝わる表現が多くて、「言葉のたから箱」が巻末についているなど、国語がとても大切だと子どもたちに伝えているということは大きいと思う。

ただ、B者のほうは、いろいろ現代的な内容も取り扱っているし、5年生の「新聞を比べよう」のところには宮城県にゆかりのある方の記事が載っているので、そこは子どもたちに興味を持たせるには有効なのかと思った。

どちらも日本の伝統芸能とか言葉とか故事成語とか、いろいろなところで言葉の大切さを伝えられている点では同じであるが、地元に関係ある記載があるということで私はB者を推薦したいと思う。

教育長 中村委員、いかがか。

中村委員 とても迷っていた。どちらも甲乙つけがたいというか、いい点がたくさんあって、どちらの教科書も子どもたちにとってよい教材になると思っていた。ただ、やはり言葉というところを重視したいと思っており、その点ではB者は「言葉の力」ということで、全単元の最初にこういうことを学ぶのだというところが出ている。C者は、最後の付録の部分まで「言葉のたから箱」のように多くの言葉が紹介されていて、言葉を使って相手の気持ちになって対話ができるようにするところ、伝統芸能という教材もあり、メディアに対する記述もあることから、C者を推薦したいと思う。

教育長 B者を推す委員が4名、C者を推す委員が2名ということで、それぞれご意見いただいたが、かなり皆さん迷ってらして、4人の方がB者を推していることからすると、全体としてはB者という流れかと思うが、その点、C者を推されたお二方の委員、ど

うだろうか。非常に難しい問い掛けをしてしまうが、C者で絶対にというところなのか、甲乙つけがたいけれどもというところなのか、そのあたりはいかがか。

中 村 委 員 甲乙つけがたいというところで、若干C者かなという感じなので、B者が選ばれたとしても、子どもたちにとってはどちらもよい部分もあるので大丈夫である。

教 育 長 各委員からご意見いただき、全体としてはB者のほうというまとめ方でよろしいか。
(異議なし)

それでは、国語については、以上ご議論いただいた内容を採択理由として事務局に整理してもらい、26日に最終的に決定したいと思う。

【書写】

教 育 長 続いて、書写について協議を行う。

事務局から、学習指導要領の目標等について説明をお願いします。

教育指導課長 担当指導主事よりご説明する。

指 導 主 事 小学校書写について説明する。

小学校書写では、国語の目標と同様である。

書写の学習指導の配慮事項については、特に文字を正しく整えて書くことができるようにするとともに、書写の能力を学習や生活に役立てる態度を育てるよう配慮すること。毛筆を使用する書写の指導は、硬筆による書写の能力の基礎を養うよう指導すること。第1学年及び第2学年の指導については、適切に運筆する能力の向上につながるよう指導を工夫することとなっている。

新しい学習指導要領は国語と同様の趣旨で改訂され、書写では、これまでの伝統的な言語文化、言葉の由来や変化、書写、読書に関する指導事項を「我が国の言語文化に関する事項」として整理された。特に文字を書く姿勢や筆記具の持ち方、点画や一文字の書き方、筆順などの事項から、文字の集まりの書き方に関する事項へ、さらには筆記具を選択し効果的に使用するなど、目的や状況に応じて書き方を判断して書くことについて示されている。

また、授業改善のための言語活動の創意工夫という点で、書写の学習が各教科の学習と関連付けられ、日常生活に生かせるような内容になるよう配慮されている。

協議会において取りまとめた小学校書写の全発行者の特長は、別紙資料2、報告の6ページから7ページにお示ししている。

主な特長については、まず、A者は、「書写のかぎ」で書写学習のポイントを示し、基礎・基本の定着を図るとともに、巻頭では1年間で学ぶ内容を記載し、児童が見通しを持って学習が進められるように配慮されているということである。

次にB者は、伝統色や伝統行事を取り上げ、日本語の美しさや季節の移り変わりなどを感じ取らせ、日本の文化に興味・関心が持てるように配慮されているということである。

次に、C者は、障害者のパラリンアートを取り入れ、さまざまな人々との共生について理解を深めることができるように工夫されているということである。

次に、D者は、石巻日日新聞、防災新聞やバリアフリー新聞などを取り上げるなど、命の大切さについて児童が自ら考えることにつながる内容となるように工夫されているということである。

次に、E者は、縦書きや横書き、観察カードなどの書き方等、実用性の高い内容が巻末の資料にまとめられ、習得した書写の技能をほかの学習や生活の場に用いることができるように配慮されているということである。

教 育 長 ただいまの事務局説明につき何かご質問等はないか。

里 村 委 員 国語と書写の関連性についてお聞きしたい。教科書を選ぶときに、発行者は自由に選んでいいものか、あるいはある程度同じ発行者を選ぶというような配慮をしながら検討したほうがいいのか。その点について教えてほしい。

指 導 主 事 小学校書写で現在使用している教科書は国語と発行者が異なっているが、各者とも学習指導要領を踏まえて作成されており、学習すべき内容や指導には違いがないように配慮されている。

発行者が同じ場合、国語や他教科で学習した文章や内容が掲載されなじみがあるという点で、授業における学びの系統性や他教科との関連性をより意識できる可能性があり、そのような授業を行うことは可能と考える。

一方、発行者が違うことで、さまざまな文章や文学作品に出会え、文字や文章に対する関心が高まったり、学びが広がったりする利点もあるのではないかと考える。

教 育 長 ほかにご質問等はないか。

花 輪 委 員 一つ質問だが、1年生、者によっては2年生まで水書シートというのをつけて、そこで練習しなさいという指示がなされている。水書筆というのを見ると、広義にとれば毛筆のように見えて、先ほどの説明にもあった「毛筆を使用する書写の指導は硬筆による」と書いてあるのと真逆のように思う。その考え方というか、あるいは学習指導要領で何か既に指摘があるのであれば教えていただきたい。

指 導 主 事 お話があったように、各発行者で第1学年、第2学年の教科書に水書用筆等での指導ができるように工夫されている。これは新学習指導要領において、水書用筆が、第1学年及び第2学年の知識及び技能の(3)ウの(イ)における点画の書き方や文字の形に注意しながら書くことの指導について、適切に運筆する能力の向上につながるよう指導を工夫することと示しているからである。早い段階から硬筆の書写の能力を高めるための関連的な指導を工夫することが望ましいとあり、水書用筆は扱いが簡単で、弾力性に富み、時間の経過とともに筆跡が消えるという特性を持っていることで、点画の始筆から送筆、終筆までの一連の動作を繰り返し練習でき、硬筆で適切に運筆する習慣の育成や、第3学年から始まる毛筆を使用する書写の指導へ移行を円滑にするものにつながると記載されている。

教 育 長 ほかにご質問等はないか。

(質疑なし)

ないようなので、それでは各発行者の教科書見本本に委員の皆様方からご意見をいただきたいと思う。

花輪委員、いかがか。

花 輪 委 員 書写という教科は、硬筆と毛筆で平仮名・片仮名・漢字などの文字を読みやすい、整ったきれいな字で書ける技術を習得し、さらにその技術を手紙、あるいはポスターなど文字を書くさまざまな場面に応用する力を得ることを目標とする教科であると思う。

今回、5者の教科書が提案されているが、どの者も先の目標を達成するような様々な工夫を凝らしていると言える。

まず、A者から述べる。5者の中で唯一、A B判をとっている。横に幅広いという意味である。ほかはB 5判である。各学年1冊で、1年生の教科書には今お話があった水書シートを設けている。学習の仕方を「見つけよう」「確かめよう」「生かそう」「話し合おう」「広げよう」の5段階で系統的に構成している。また、どの学年でも「生活に広げよう」「学びを生かそう」の項目と、知識や情報を伝える「文字のいずみ」を配し、また巻末には習った漢字などをまとめた資料を配置している。書写への興味をかき立てる工夫をしていると思う。

低学年では硬筆、高学年では毛筆に重点が置かれており、基本的にはそれを踏襲はしているが、高学年では書写で学んだことを生かして応用するような方向を特に示していると思う。例えば4年生では「新聞を作ろう」「お礼の気持ちを手紙で伝えよう」、5年生、以下、略するが、さまざまな提案をしている。

3年生以上の教科書では、左ページの左端に「書写のかぎ」のマークが示され、そのページを学ぶときのポイントが明示されているという工夫をしている。全体として、楽しんで書こうよと提案している教科書ではないかと思う。

次はB者である。B 5判で、この者も各学年1冊の構成、以下同じである。この者は1・2年生の教科書に水書シートがある。2年生でも水書シートがあるのはこの者だけである。1年生から6年生まで「考える」「確かめる」「生かす」の3段階で一貫して学習を進めている。学習者にとってとっつきやすい工夫がなされているのではないだろうか。高学年では基本の上に、さらに試し書き、最後にまとめ書きをするなどの工夫がなされている。5年生の教科書の冒頭に、「書写の学習で大切なこと」、6年生では書写の学習の意義の記載があるのは、学ぶモチベーションを高める役割を担うものであり、意義を考えさせるというのは大変好ましいと思う。巻末には習った漢字、これは国語で習う漢字であるが、毛筆書きで、どの者も載せてはいるが、特に大きなフォントで載せているのは大変よろしいと思う。

C者、B 5判、各学年1冊の構成。1年生の教科書には水書シートがある。冒頭に前年の学習の振り返りとその年次で学習することのまとめ、目標が書いてあり、非常に見通しを立てやすい教科書になっている。具体的に手を動かす5から10の単元のほかに、「レッツ・トライ」「知りたい 文字の世界」「書いて伝え合おう」「知っておこう」などの項目が設けられており、書写に関する知識や情報、ノートやメモをとること、ポスターや学級新聞をつくることなどへの応用へ導いているのは大変好ましいと思う。6年生の教科書では、実際に児童が書いた書が掲載されているのがよい。なぜほかの者はもっと載せないのだろうかというのが私の感想である。

次にD者。D者は、毛筆の最初の学びで、特に重要な斜め穂先、始筆、送筆、終筆のチェックをきっちりさせているというのが特長である。これを繰り返し行っている。一番の特長は、どの年次でも基本を押さえるところから教科書を始めているのが大変いいと思う。

毛筆の作品の例示、いろいろな漢字を例としてほかの者は並べているが、その数は少ないと思う。これは基本をしっかり習得させるという一貫した方針で行っているのだろうと理解した。

各年次、学習の最後にまとめの項目があるが、さらに6年生の教科書には「書写ブック」として、6年間の学習内容がまとめられ、生活に生かすことを奨励しているのはすぐれたアイデアである。特に名前のついたキャラクターが出てくるわけではない

が、教科書の雰囲気はとてもほのぼのとさせるものがある。

E者である。1年生のノートに水書筆の記載はあるが、水書シートはこの教科書は持っていない。1・2年生の教科書にはシールをたくさん用意して、大事なところ、気を付けたいところに貼って自覚を促すようにしている。この教科書には、ふでじい先生とえんぴつ先生、それから4人の児童のキャラクターが登場する。動きの指示や感想などを教科書のところどころに配置している。その指示の内容などは、児童も素直に受け入れやすいのではないかと思う。

硬筆も毛筆も多くの種類の文字を書くことを目指している教科書だと思う。巻末には各学年のまとめをするとともに、「書写のしりょう館」を設け、各学年で繰り返し平仮名・片仮名・アルファベット・ローマ字、さらには習った漢字を毎学年まとめて示しているのは復習の意味もあり、大変いいアイデアだと思う。

教 育 長 阿子島委員、いかがか。

阿 子 島 委 員 いずれの教科書もとても扱いやすく、写真等が豊富できれいな教科書だなというのが感想である。

まずA者。A者はほかの教科書と比べてやや大き目であるが、初めに全学年で「集めて使おう、書写のかぎ」が掲載されていて、また、3年生からは、さらに書写の学び方として「見つけよう」「確かめよう」「生かそう」「ふり返って話そう」「生活に広げよう」と、書写で学んだことを生活やほかの教科の学習に広げようと、より分かりやすい説明が記載されている。「生活に広げよう」では日記や観察カード、理科の実験記録、原稿用紙、ノートの書き方、調べたことを伝える新聞など、いろいろな場面で書かれる用紙の形式や書き方が掲載されている。また、1・2年生の書きやすい持ち方のところでは、鉛筆の持ち方に左手で書く人用の掲載もあるのがよいと思う。「文字のいずみ」では、鉛筆や消しゴム、筆、和紙、すずり、墨のつくり方が掲載されている。このうちのすずりは、雄勝硯が掲載されている。

3年生からは毛筆の学習も始まり、「書写のかぎ」として左ページの端に内容が分かりやすいように索引が書いてある。また、「学びに生かそう」では、はがき、封筒の宛て名の書き方や「お礼の気持ちを手紙で伝えよう」などいろいろな内容も記載されている。

次に、B者である。B者は、1・2年生では教科書の使い方、3年生からは書写学習の進め方が載っていて、学習の進め方が分かりやすい。各学年で掲載されている「国語の広場」では、スピーチ原稿の書き方や観察記録、学習新聞や本の紹介、俳句などの書き方も掲載されている。「言葉の窓」では、1年生の「なかまのことばをみつけよう」から6年生の「言葉を集めて季節感を楽しもう」まで、各学年に応じて語彙力を高める要素が記載されているのがよいと思う。

「生活と書写」では、原稿用紙の使い方や連絡帳などの書き方のほか、手紙の書き方、5年生ではアルファベットやエアメールの書き方も記載されているのが特長である。また、5年生では「用具の産地をたずねて」として、奈良筆ができるまでが掲載されている。

なお、6年生には、漢字の始まりから平仮名と片仮名ができるまでが掲載されているのもよいと思う。

次に、C者である。1年生の初めに「がっこうのもじたんけん」として校内に書かれている文字を探したり、2年生の「町の文字たんけん」では町の中に書かれている

文字を探すなど、子どもたちに書写を楽しく取り組んでもらう導入として、また生活科などの教科とも関連してとてもよいと思う。

「レッツ・トライ」の横書きの書き方のところには数字の書き方や算数のノートの書き方、理科のノートのまとめ方、メモのとり方としてはお話の聞き取りメモの書き方が掲載されているなど、算数や生活、理科など、ほかの教科にも活用されることを子どもたちに理解させるのに有効だと思う。

さらに、「知りたい 文字の世界」の3年生では、筆の作り方のところに筆の穂の材料の写真の掲載があり、4年生では様々なるたの紹介の後、「ぼうさいかるたを作ろう」なども記載されているのも特長的だと思う。また「書いて伝え合おう」のところでは、学級新聞の作り方や年賀状、絵はがきの書き方、6年生の「文字の旅」として、日本の文字の歴史が掲載されているのはよい。

次にD者である。1年生は自分の名前を書くところから始まっている。横書きの書き方は、生活科の観察日記、算数のノートや数字の書き方など、ほかの教科でも書写の学習が生かせるような教材が掲載されている。

各学年の漢字図鑑は、漢字の成り立ちがイラスト入りで掲載されている。

2年生の原稿用紙の書き方のところは、見開きで大きく掲載されていて分かりやすいし、「もっと知りたい」の鉛筆の秘密には、鉛筆の製造の写真のほかに、芯の濃さの違いや、鉛筆1本で書ける長さなども掲載されているのもおもしろいと思う。

3年生から6年生には学年の進み方が記載されている。また、「もっと知りたい」の3年生では筆のできるまで、4年生では、最後に紙・墨・すずりができるまでの写真が掲載されている。5年生では「手書きの力」のところに、石巻の日日新聞が掲載されていたり、「やってみよう」の発表用ポスターには防災についての内容が書かれているなど、いろいろな関係のところも学べると思う。また、「英語で書いてみよう」では、英語の名刺をつくる内容が記載されていて、英語科とも関連がなされていくと思う。

6年生には「書写ブック」として、1年生から6年生までのまとめがついているのもよい。

背表紙には1・2年生には五十音、3・4年生が鉛筆の持ち方、5・6年生が鉛筆と筆の持ち方が掲載されているのもよかったと思う。

次にE者である。全学年に学習の進め方が記載されている。1年生は「みのまわりのもじをさがそう」から始まっていて、「書写のふしぎ」の2年生では、鉛筆と消しゴムのつくり方、鉛筆と消しゴムの歴史も掲載されているし、3年生では、筆・墨のつくり方、4年生ではすずり・和紙のつくり方がそれぞれ1ページずつ大きく掲載されている。また、5年生では片仮名の成り立ちも記載されている。

「書写のしりょう館」のところでは、1年生では、縦書き、横書き、数字のなぞり書きが書き込めるようになっているし、4年生から6年生では、都道府県名が練習できるようになっている。また、「読みやすく書こう」の4年生では学級新聞、5年生では表とグラフ、6年生はポスターやお知らせなど、書き方がいろいろ掲載されているのはよい。

どの学年も全体的に教科書に直接書き込めるところが特長的である。

教 育 長 加藤委員、いかがか。

加 藤 委 員 まずA者は、1年生の最初で、運筆の基礎を丁寧に取り上げてくれている。その後、

平仮名、片仮名、漢字に進んでいっても、導入には運筆の練習の場所が用意されている。3年生で毛筆が出てくるときにも同様である。1年生の片仮名を縦書きと横書きで練習させているのも現実的でよいと思った。2年生の観察カード、3年生の理科の実験記録、新聞、「ありがとうを伝える」、インタビューのメモなど、それぞれ生活科や社会科とクロスさせているなど、書写と国語の間だけでなく、他教科との関連も意識されていることが分かった。

B者は、目当てと振り返りが明確である。学年ごとの書き初めでは「私のめあて」を自分で書かせるという工夫もある。5年生で「自分の文字と向き合って」という場所があった。詩を書いて、そこから自分の文字の課題を見付ける。直前まで学習した字形を整えるポイントや、4年生までに学習した文字の大きさ、行の中心などのポイントを思い出させて、自分の文字の課題を見付けるようになっていた。6年生で、なぜ今、書写を学ぶのかということについて、書写学習の意義についてまとめているのも印象的であった。一つには、書くことで言葉を正しく身に付けられるのだということ。二つ目には、手書き文字には心があらわれるということ。3番目に、書は伝統文化であるということが紹介されていて、こうした点も書写がもつ独自の教科の意味を伝えていると思う。

C者であるが、1年生の「がっこうのもじたんけん」、2年生では「町の文字たんけん」、これらは生活科の同時期の教材とつながっていてよいと思う。

また、他教科とのリンクや生かし方が、社会で生かす、理科で生かすなど、児童生徒にも分かりやすく示されていると思った。片仮名は、こちらも横書きが取り入れられている。そういった面も現実的だと思う。

また、目当てと振り返りが同じパターンで示されていくので、児童にも明確で分かりやすいと思った。

D者について。1年生のときに、最初に自分の名前を書かせて、平仮名の学習を終えてから、習ったことを生かして再度自分の名前を平仮名で書こう、また、片仮名の学習を終えてから、自分の名前を片仮名で書こうという配列になっている。こうした配列の配慮で、児童は、書写の学習を通じて自分の名前を上手に書けるようになったことを実感できるのではないかと思い、ありがたいと思った。その時間の目当てに対して「できたかな」、あるいは「振り返ろう」の振り返りが大変具体的で明確な項目で問われており、児童にとって分かりやすいものとなっている。

「たいせつ」では、書き方のポイントが指摘されており、その時間内で振り返ることができるようになっていくことが授業の中に取り入れやすい点である。また、学年末には「たいせつ」のまとめとして、総合的な振り返りができるようになっている。

5年生で、手書き文字と活字について触れている。世の中にタイプ文字が多くなり、あえて手書きである必要のない時代になっているわけだが、「手書きの力」というコラムを設け、東日本大震災後の石巻日日新聞を取り上げることによって、手書き文字には活字とは別の力があると記している点が大変印象に残った。

E者である。1年生の最初の運筆の練習、3年生の毛筆導入の運筆の練習が丁寧に取り上げられていた。また、二文字、文字2つの毛筆の手本が半紙と同じ大きさなのではないかと思ったのだが、児童生徒にとってそのまま横に置いて手本にできるようになっていると思う。また、文字や用具の歴史が紹介されている。「たしかめて書く」「考えて書く」「生かして書く」など、単に文字を習うことを超えて書の伝統や考え

方を伝えている点も印象的である。

教 育 長 中村委員、いかがか。

中 村 委 員 最初にA者は、「生活に広げよう」では、メモやポスターの書き方など国語と関連付けて学べて、その後の生活に取り入れられるように工夫がなされている。そして単元に「書写のかぎ」という形で設定がされていて、その単元で学習することや重要なポイントが示されており、子どもたちが見通しを持って学習に取り組めるのではないかと思う。また、防災マップづくりを呼び掛けるポスターを書くというような、地域社会の防災や安全への意識を高めようとする配慮もなされている。そしてリーフレット作りや虫の観察カードなど、関連マークを用い、ほかの教科と関連付けた学習ができるように配慮されていると思う。

また、「文字のいずみ」として、世界の文字のいろいろや日本の文字の歴史などが掲載され、文字について興味を持って幅広く学習が広がっていきけるのではないか。

B者である。先ほどのA者も水書シートがあるのだが、B者の方は1・2年生に水書きシートという名前を取り入れられており、3年生からの毛筆学習にスムーズに入れる工夫がなされている。また、全学年に「言葉の窓」というページがあり、学年に合ったテーマで言語活動ができるような工夫がある。伝統色や伝統行事も取り上げられていて、日本語の美しさを感じられ、日本文化に興味・関心が持てるように配慮されている。

3年生以降に手紙やはがきの書き方が学年に合わせて詳しく示されていて、発達の段階に応じた学習ができるようになっている。

C者である。同じように4年生以降に手紙の書き方が学年に合わせて詳しく示されている。やはり発達に応じた学習ができる工夫がなされていると思った。そして全学年とも「書いて伝え合おう」というページがあり、メモのとり方や新聞、はがきなど、その学年に合ったテーマで主体的・対話的な活動ができるように工夫されていると思う。また、「レッツ・トライ」のページだが、学習した内容を生かし、日常生活やほかの教科などにも通じる様々な学習活動に生かせるようになっていた。そして伝統的な内容の記載が充実していて、日本文化に触れる機会が多くなるような形になっている。

D者である。各単元に大切なことがマークされている「たいせつ」という部分があり、その学年のまとめで「たいせつ」というもののまとめが集約されていて、これまでの学習の振り返りができるようになっている。忘れてしまっても、ここを見れば大部分わかる形になっていて、これは大変重宝だと思った。6年生には「書写ブック」として、全学年で学んだことがまとめられてあり、日常生活の中に生かすことができるような工夫もなされている。そして短歌などを学習する教材もあり、「もっと知りたい」としたコーナーがあって、文字の文化や歴史に興味を持つように、子どもたちも幅広い知識を得られるような形になっている。また、石巻日日新聞やバリアフリー新聞などのような教材が取り上げられていて、命の大切さや他人を思いやる心が育まれるような工夫がなされている。

E者である。全学年を通して「書写のしりょう館」が充実していて、ローマ字やメモのとり方など、子どもたちが興味を持って学べるようになっている。また、その中で4年生、5年生、6年生では都道府県名を書くところがあるのだが、県名を書くことによって県名が覚えられ、社会の勉強にもつながっていくのだと感じた。

また、伝統的な遊びや古典など日本文化に関わる資料もあり、文化を理解し、そして守って伝えていけるような形が配慮されている。「なに？なぜ？書写の不思議」というコーナーでは、文字の成り立ちや歴史が示されている。子どもたちが文字について幅広く知識を得ることができるようになってきているのだと思った。また、こちらのところでキャラクターの吹き出しによる学びのヒントなどがあり、子どもたちが主体的に学習できるような工夫がなされている。

教 育 長 里村委員、いかがか。

里 村 委 員 まず、A者であるが、一言で申し上げると、文字の整え方を理解させるという教科書だと思う。文字の配列とか文字の歴史などを幅広く学習させる中で、文字の整え方を学ぶところに力点がある。

そのほかに申し上げますと、單元ごとに「書写のかぎ」というのが設定されていて、ねらいを明確に示すことで知識とか技能の習得に役立つよう工夫されている。それから硬筆文字から課題を発見して毛筆文字に移るということで、知識・技能の定着を図ろうという工夫もされている。

B者は、一言で言うと、正しく書くことの大切さを勉強するという教科書になっている。「生活と書写」あるいは「国語の広場」を設けて、話す・聞く、書く、読む、の領域における言語活動を具体的な教材として取り上げている。筆の送り方とかとめ方をドングリで示しているが、私にとってはとても分かりやすいものであった。

C者である。ここの一つの特長は、防災教育との関連性をかなり強めた編集になっているように思う。そしてB者と同じように、全学年に手紙やはがきが書けるような題材を設定しており、児童の発達の段階に応じた書写の教育、これが進めやすいように工夫してあると思う。一言で申し上げますと、発達の段階に応じた書写の教育、これがスムーズにいくような編集になっていると思う。

協議会でも話し合われたようだが、障害者アートを取り入れて、さまざまな人々との共生について理解を深めるというような観点の配慮もされている。

D者である。これは一言で申し上げますと、文字を書くことにとどめない教科書だ。教材で使う語句や文章を他教科の学習内容から幅広く取り上げており、意欲を増進させながら、文字を書くことだけにとどめない、そういう教科書になっているということである。したがって、漢字の成り立ちとか伝統的な言語文化への理解を深めさせるような配慮がされている。具体的に幾つか申し上げますと、6年生では短冊を書こうとか、5年生ではインタビューメモの書き方についても書写で取り上げており、文字を書くことにとどまらない、そういう学習ができる教科書だと思う。

E者であるが、ここはたくさん書き込みをさせようという意図が感じられ、豊富な書き込み欄を設定して、児童に整えて書く習慣を身に付けさせようということを意図している教科書のように思う。教材は非常に多様で、伝統的な遊びとか古典、J-P O Pの歌詞とかいろいろなものを取り上げていたが、子どもたちに、たくさん書き込み欄を設けてたくさん書くことで勉強しようというふうに、そこに力を置いている教科書だと思う。

教 育 長 吉田委員、いかがか。

吉 田 委 員 書写にはさまざまな学習要素があると思う。私からは、特にその中の一つである字形に関する学習について焦点化してお話し申し上げたい。

ご存じのように文字を書くということを学習として初めて体験するのが1年生。入

門期における字形の意識が以後の書写学習への影響だけでなく、文字を書くという生活全体に与える影響は大きいものかと思う。ですから、ある程度定着してから、直そうとしてもなかなか直せないというのが現実的にある。そこで、1学年における平仮名・片仮名・漢字の書き方に対する配慮状況を中心に確認してみた。

まず、平仮名の曲がり、折れ、結びなどにそれぞれ2ページを費やして丁寧に編集していたのがA者、B者、E者。そして折れと折り返しの違いを分けて示していたのがB者、C者、D者、E者。さらに、折れと折り返し、折れと曲がりの違いを明らかにして解説していたのがE者。

続いて片仮名である。片仮名についても同じように、はね、とめ、はらいと、折れ、曲がりにそれぞれ2ページを費やして丁寧に編集しているという印象を受けたのがA者、D者、E者。

そして、漢字については、とめ、はね、はらいは各者とも丁寧な扱いをしているが、中でも字形である長さ、方向、バランスにページ数を費やして、その意識化を図っていたのがA者、E者という印象を受けた。

そして、漢字を中心に学習を進めるのは2学年からであるが、硬筆による漢字の字形について、それぞれのテーマごとページを割いて編集していたのがA者、E者。点画の間隔についてバランスの崩れた例示をして意識化を図っていたのがA者、B者、C者、D者となる。

3学年からいよいよ毛筆の学習が始まるが、2つの漢字の組み合わせによる変化について、3学年から構成し、意識化を図っていたのがB者、C者、D者である。4学年からは、A者とE者になる。中でもそのバランスの在り方に3学年から注意を払っているのがD者。4学年からはB者となる。

そして、大変効果的だなという印象を受けたのが、先ほどから皆さんの話の中で水書用紙、水書用筆ということがあるが、それと逆となるだろうか、いわゆる毛筆をやったそのときの学習要素である筆圧、筆の運びというような筆使いを硬筆にも生かすという配列をしていたのがE者である。それは4学年以降も続く。ということで、毛筆のあり方の効果を硬筆でも生かしていくという、その定着を図っていることに意識化されているという印象を受けた。

ここからは字形から離れるが、中学年、特に高学年において、生活における伝達手段としての文字への意識化を図ることも大変大切なことかと思うが、その点で分かりやすく編集されているという印象を受けたのがA者、C者、D者である。さらに、技能の獲得であるから、単なる練習だけではなく、子ども自身も見通しを持って、ここでは何をすればいいのかということを考えながら書く練習をするという意味で、題材名とか目的、タイトル以外に、学習を進める注意事項とか目指すことについて改めて表記していたのがB者、E者であった。特に分かりやすく明確な表記だという印象を受けたのがE者である。

教 育 長 ただいま各委員から、各発行者の教科書見本本にご意見をいただいた。書写については5者から提示があったわけであり、一定の絞り込みを行わないといけないと思っている。各委員から、それぞれご自身が推薦する三つの発行者を発表していただきたい。

先ほどの順番で、花輪委員から願います。

花 輪 委 員 私は、A者、B者、D者の3者を推薦する。

阿子島委員 私も、A者、B者、D者を推薦する。

加藤委員 A者、C者、D者になる。

中村委員 A者、C者、D者を推薦する。

里村委員 A者、B者、D者である。

吉田委員 A者、B者、E者である。

教 育 長 各委員からいただいたものを集計すると、上位3つがA者、B者、D者となる。

次の段階として、A者、B者、D者についてご意見いただきながら1者に絞っていききたいと思う。各委員、この三つの中から、ご自身としてこの発行者が一番適しているというようなご意見をいただきたいと思う。

里村委員 いろいろ悩むが、一つにということであれば私はD者を推薦したいと思う。先ほども申し上げたが、書写の勉強ということではなく、文字だけにとどまらないで広く学びが日常にあるということを伝える教科書としてはD者がすぐれているかと思う。そういう意味で、1者ということであればD者を推薦したい。

教 育 長 ほかの委員の皆さん、ご自由にご推薦いただければと思う。

加藤委員 先ほど吉田委員から字形のことについて大変細かくご指摘いただいた。私としては、その部分が専門的にはなかなか分からなかった点だったので、残ったA者、D者、B者について、字形のことをもう少し教えていただけるとありがたい。この3者について、それを含めてもう一度考えてみたいと思う。

吉田委員 例えば折れと折り返しは違うわけである。平仮名で言えば「そ」の字が折り返しで、来たところをもう一度戻す。その違いがきちんと押さえられているかどうかポイントであろう。そのほかに、折れと曲がりも違う。そういうことが明記されたというより、私自身が見て取りやすかったのが、3つには入っていなかったがE者であった。

そういう意味であるが、私自身も迷うわけである、それだけが書写かとも思う。皆さんがおっしゃるように、もっと広い意味での書写という学習活動があるのではないかと。ただ、どうしても我々は小学校のときの学習が後々まで影響していく。であるから出会いが肝心ということで、初めをしっかりと押さえることが肝心かと思い、そういうことにこだわって申し上げた。ただ、それだけではないだろうなという気持ちもある。

花輪委員 私はA、B、Dと推薦したが、私の頭の中でAとDが拮抗していて、どちらかだと思っていた。この二つはかなり性格が違う。A者は、もちろん毛筆・硬筆を学んだ後に、それを積極的にいろいろなところに応用しようよ、あるいは実生活で使ってみましょうという提案がすぐれている教科書だと思う。例えば4年生では「新聞を作ろう」「お礼の気持ちを手紙で伝えよう」、5年生になると「委員会活動を伝えるリーフレットを作ろう」、あるいは「6年生におくる言葉を書こう」などという提案をして、自分で得た書く技術、そういったものを積極的に使っていきましょうという提案をしている教科書かと思う。

一方、最初に申し上げたように、D者は繰り返し基本を押さえている。テクニカルな面での取り扱いの様子は吉田委員、解説していただいたとおりでろうと思うが、例えば1年生でやったことも、2年生の教科書をとると、字を書く姿勢、鉛筆の持ち方を示した後、点や画の組み立て、書き順、点と画の名前、はらいの方向、折れの方向、そりの方向などと、非常に基本的なところを繰り返し練習するようなプロセスになっている。これは高学年までそうであり、それであるがゆえに例示する語句というか、

毛筆・硬筆等の例の数はそのために少ないのだろうと私は思った。

繰り返しになると、基礎のD者、応用のA者のような印象を持っていて、どちらがいいのだろうとすごく悩む。ただ、自分のことを振り返ると、私はものすごく悪筆であるが、あのときD者でやっていたらなという思いもするので、どうしても選ばなければいけないということであればD者を選ぶ。

教 育 長 そのほかの委員の皆さん、ご意見をお願いします。

中 村 委 員 私が推薦したA者とD者が入っていて、甲乙付け難いところではあったが、今までのお話を聞いていたり、1年生のところで見比べてみたとき、とめ、はらい、はねなどが見開きできちんとその言葉と文字が目に入る。小さい言葉で説明をするのではなく、これとこれはこういうことだというのがしっかり目に入ってくるという部分で、D者のほうが良いという感じもしていた。

そして、書写という形であるものなので、手書きの力というところをD者には感じていて、新聞とかそういったものでいかに伝えていくかというような、石巻日日新聞などの本当に記者の方が手書きでこういうふうに伝えているのだよということもあって、手書きの力というか、そういったものを伝えられるのはD者と思ってD者を推薦したいと思う。

教 育 長 ほかの委員はいかがか。

加 藤 委 員 小学校1年生、入り口のところでA者が鉛筆で書いてみようという、線の書き方というものを何度も練習させている。つまり、いきなり文字ではなく線を書く、そういう運筆の部分が大変たくさんある。線を書く、目と手を供給させ、力をコントロールすることから始まるのは大変いいなと思った。

ただ、先ほど国語のところでB者を採用した。B者の1年生の平仮名の表と、D者の平仮名の表を見ると、はねるところが違う文字がある。最初に、書写を選ぶに当たり、国語と書写の発行者が異なることについてはどうなのかという質問があり、それは無関係であるということだった。しかし、殊に最初に学ぼうとする時期に、はねとか折れという点について、家庭学習でも保護者が見なければいけないと思っているときに、こうした違いがあるとどうなのかなというのは引っ掛かるところである。具体的には「た」と「に」で、はねがあるのとないのと出ている。なので、その辺で私自身どうしたらいいのか悩むところがある。

ただ、書写ということで純粹に選ぶときには、私も基本的な書写への姿勢から選びたいということでD者である。

阿 子 島 委 員 私もこの3者、いずれも素晴らしい教科書だと思うが、加藤委員がおっしゃった1年生で最初に鉛筆になれようということでは、A者になぞり書きのところがある。B者も見開きで、直線だけではなくギザギザ線とかグルグル線、折れとかはらいの練習もあるので、どちらも良いと思った。さらに、次の文字を書くところにつながる記載があるところはよい。

でも、文字をきちんと覚えてしっかりと硬筆から毛筆につながる点ではD者が分かりやすいという印象は受けた。内容的にも「手書きの力」ということで、地元石巻のことも載っていたり、そういう点から見ても、子どもたちに、書くことはとにかく硬筆でも毛筆でもいろいろなものでみんなに伝えていくことができるということが分かりやすくいいのではないかと思った。

教 育 長 吉田委員に伺うが、A、B、Dの3者、改めて比べての感想というか意見というか、

お願いしたいと思う。

吉田委員 私にとっては仕切り直しという形になってしまうわけだが、やはりA、B、Dで、残ったのがA、Dという皆さんの意見である。

確かにA者は、総合的に全て字形についてしっかりと一つ一つ押さえた形である。先ほど申し上げたように、折れと折り返しの違いあたりは残念ながらA者はなかった。D者はあったということ。それから皆さんの話を聞いていて、繰り返し繰り返しなさっているということを踏まえると、先ほど言った教科書の字形と若干のずれはあるということも踏まえて、そこは授業者に関わってもらおうかなということ考えた場合に、皆さんのご意見のようにD者ということでもいいのかなと思う。

教育長 各委員からそれぞれご意見をいただき、その集約としてはD者ということでもとまろうかと思う。そういったことでD者ということでもよろしいか。

(異議なし)

それでは、ここまでの議論を踏まえて、事務局のほうでD者の方向でもとめていただくということで、書写の件については閉めたいと思う。

それでは、ここで一旦休憩とする。4時15分までの休憩とする。

(休憩 午後4時06分～午後4時16分)

教育長 それでは、協議を再開する。

【算数】

教育長 次に、算数についての協議である。

事務局から、学習指導要領の目標等について説明をお願いする。

教育指導課長 担当指導主事よりご説明する。

指導主事 小学校算数について説明する。

小学校算数では、数学的な見方、考え方を働かせ、数学的活動を通して数学的に考える資質能力を目指している。

新しい学習指導要領では、算数に関して、数学的に考える資質能力の育成を目指す観点から、実社会との関わりと算数・数学を総合的・発展的に構成していくことを意識して数学的活動の充実等を図った。また、社会生活など様々な場面において必要なデータを収集して分析し、その傾向を踏まえて課題を解決したり意思決定をしたりすることが求められており、そのような能力の育成を目指すため、統計的な内容等の改善、充実を図ったというような趣旨で改訂が行われた。

協議会において取りまとめた小学校算数の全発行者の特長は、別紙資料2、報告の8から9ページにお示ししている。

主な特長については、まずA者は、4コマ漫画を活用して単元のまとめをしており、児童が興味・関心を持って取り組むことができるように工夫されているということである。

次に、B者は、さまざまな職業を取り上げ、算数で学んだ内容が社会に役立つことを児童が実感できる工夫がなされているということである。

次に、C者は、1年生の分冊は上下ではなく、ノート指導前に使用するものがA4判で別になっており、書き込みや数学的活動がしやすいように配慮されているという

ことである。

次にD者は「まなびナビ」で算数における学習の形態を示し、児童が学び合いを通して数学的思考を深めることができるように配慮されているということである。

次に、E者は、判が大きく、同じ情報量でも空白部分を広くするなど、見やすく、分かりやすい工夫がなされているということである。

次に、F者は、巻頭に学び方を掲載して主体的な学びを促すとともに、問題解決型の学習課程のポイントを示し、主体的・対話的で深い学びの実現を目指す工夫がなされているということである。

教 育 長 ただいまの事務局の説明についてご質問があればお願いします。

(質疑なし)

特にないようなので、それでは各発行者の教科書見本本にご意見をいただきたいと思う。

初めに、阿子島委員からお願いします。

阿 子 島 委 員 いずれもイラストや写真がとても多く、見やすい教科書だったので、子どもたちが喜んで取り組める教科書ではないかと感じた。

まずA者。A者は、1年生と5年生・6年生が1冊で、2年生から4年生まで上下巻2冊に分冊されている。2年生の初めから6年生までは、「算数をはじめよう」の学習のてびきとして、学習の進め方や算数で使いたい考え方が記載されているので、子どもたちも学習の内容が分かりやすい。また、イラストや写真が多いので見やすいし、裏表紙の「算数みつけた」も楽しみながら探せる。

全学年、巻末には各学年のまとめや自分で取り組むページが記載されている。

1年生はスタートカリキュラムで始まり、楽しみながら数字に慣れていき、だんだんと数式を使った問題を学習していく形になっている。2年生では、九九を練習するための九九づくりの図や九九のジグソーパズル、算数カレンダーなどが添付されている。

3年生の「学びのてびき」には、コンパスの使い方や二等辺三角形のかき方が記載されている。4年生では、写真と同じ場所の地図を見付ける学習から、垂直・平行と四角形の学習につながっていく。学びのてびきでは、分度器の使い方や垂直・平行な直線の書き方が記載されている。

5年生の「グラフでいちばんを伝えよう」のところでは、インターネットなどで調べたデータや割合をグラフに描いて分かりやすく伝えるなど、他教科に関連のある学習が記載されている。

6年生では、「開け！算数ワールド」のところで、江戸時代の算数や点字の仕組み、国で違う数の表わし方など、社会や歴史と関連のある学習も記載されている。

次に、B者である。1年生と、5・6年生が1冊、2年生から4年生までが上下巻2冊に分冊されている。2年生からは、教科書の使い方、学習の進め方、わくわく算数学習、わくわく算数ノートが記載されていて、学習の内容が分かりやすいと思う。

1年生はスタートカリキュラムで子どもたちに合ったペースで授業が進められる。2年生では九九の学習のところで、九九表や九九カードを使った練習を行ったり、巻末に九九の円盤がついている。また、三角形と四角形のところでは、身の回りの図形を探してみようと掲載されていて、こちらも生活科などにもつながるのではないかと思う。3年生では、長さを測る道具や重さの単位、少数などがイラストで分かりやす

く紹介されている。巻末には三角形の色紙や吹きコマなどが付いている。

4年生では、学びのまとめで、分度器の使い方が載っている。巻末に、分度器や四角形づくりのカードも付いている。また、調べ方や整理の仕方、表に表わす過程も記載されている。5年生では巻末に円周測定マシンや図形シートが付いていて、実際に自分で使って確かめながら授業が進められるようになっている。6年生では「算数パスポート」として6年のまとめが記載されている。数と式から、問題の見方、考え方まで、6つの部屋で構成されていて、その後に「発展」として、中学校の問題も記載されている。また、「広がる算数」のところには、いろいろな職業の人たちが算数との関わりを紹介しているのがよいと思う。

C者は、6年生は1冊、2年生から5年生まで上下2冊に分冊されている。1年生はスタートカリキュラムがスムーズに始まるように、第1分冊はA4判と大きく、ブロックを置いた学習などがしやすいように工夫されている。そして数への関心が高まった後、第2分冊に移り、数式も使う学習へと進んでいく。

2年生からは、目次の次に「学びのとびら」とマイノートが記載されていて、授業のペースを踏まえたノートの作り方が記載されている。そして、学習の進め方へと続いていく。また、「つないでいこう算数の目」では、数学的な見方、考え方を明示しているほか、「いかしてみよう」「たしかめよう」「おぼえているかな？」では、それぞれ学校や日常生活に生かしてみる、理解できているか確かめる、覚えているか問題を解いてみるなど、繰り返し復習することで算数の理解度を高めるようになっている。

また、2年生では九九のビンゴ、九九の連絡帳、九九の表のほか、巻末には九九認定証がついている。さらに各学年の最後には復習問題と、2年生からは補充問題や「おもしろ問題にチャレンジ」が記載されている。また、5・6年生には「プログラミングを体験しよう」が載っている。そして、6年生の最後には、「算数卒業旅行」と題して、中学校体験入学コース、国際コース、和算のコース、クイズ・パズルコースなどがあり、楽しんで6年間の学習を振り返ることができるのではないかと思った。

次に、D者である。いつでも前学年までのまとめの振り返りができるように、全学年1冊となっている。2年生からは目次や「たのしい算数」の使い方、「算数まなびナビ」が記載されている。1年生からプログラミングに関する問題が記載されていて、5・6年生はプログラミングのソフトを使って学習するようになっている。各所に確かめ問題があり、各学年の最後には復習問題が記載されている。3年生からは「ふむろろ先生のならほど算数教室」があり、九九の不思議や外国のおつりの渡し方や英語の数の数え方、円周率の歴史、点字の仕組み、江戸時代の高度な数学・和算など、いろいろなことが記載されている。なお、「算数お仕事インタビュー」では、お仕事の中で算数がどのように役立っているかをインタビューして、自分づくり教育にも役立つようになっている。6年生では、最後に6年間のまとめが記載されている。

次に、E者である。E者は1年生から5年生までは上下巻2冊に分冊されていて、6年生は1冊であるが、「中学校へのかけ橋」として別冊がついている。1年生からはプログラミング的思考に触れられるようにと、各学年でいろいろな問題が提示されていて、なお、5年生・6年生では、実際にタブレットやスマートフォン、パソコンなどを使って学習できるQRコードなどが記載されている。

2年生からは、目次の次に3つの学びの力を育てようとして、「考える力」「判断

する力」「表す力」が紹介されている。また、「算数で見つきたい考え方モンスター」のキャラクターが登場してきて、6年生の教科書まで活躍する。さらに、「3つの学び方で学習を進めよう」と、「自ら進んで学ぶ楽しい算数」、「友達と話し合ってみつける算数」、「学習したことをいかしてつなげる算数」が記載されている。

なお、それぞれの学年の教科書の最後には、各学年の復習と補充問題が掲載されている。さらに、5年生の「今の自分を知ろう」では、修学旅行のツアーガイドブックを作ろうと題して、さまざまなデータやグラフに表わしてまとめる学習が紹介されており、6年生の「今の自分を知ろう」のところでは、「卒業式を演出したい」と題して、ありがとうカードをつくったり、入場行進の提案なども行っている。また、6年生の「生活に生かそう、深めよう」のところでは、対象な図形を探そうと都道府県マークや道路標識、地図記号、ピクトグラムなどが掲載されており、「振り返ろう、つなげよう」では、中学校への発展問題も記載されている。

最後にF者である。1年生から5年生までは上下巻2冊の分冊、6年生は1冊となっている。1年生の下巻から目次の次に、算数の学習の進め方が記載されている。2年生からは「さあ算数の学習を始めよう」として、どんな問題かな、考えよう、学び合おう、振り返ろうと、学習の進め方、算数ノートも作ろうとノートの書き方が詳しく掲載されている。また、教科書の使い方も説明されている。2年生からの最後には、各学年の復習と「算数マイトライ」が掲載されていて、巻末には学び方ガイドがついている。また、2年生は九九マスターカード、3年生では割り算すごろくなどがついている。3年生の「なるほど算数」では、昔の長さの単位や外国の長さの単位の説明、4年生では電卓を使ってみよう、5年生では簡単な平均の求め方、6年生ではハノイの塔などが記載されている。さらに、6年生では都道府県マークや地図記号などが対象の見方調べを掲載したり、6年間のまとめが記載されている。

なお、小中連携の対応として「マテマランドを探検しよう」とか「もうすぐ中学校」として、中学校で習う内容にも少し触れているのが特長のかと思った。

教 育 長 加藤委員、いかがか。

加 藤 委 員 まず、A者であるが、算数で使いたい考え方として、2年生から4年生では、「順序よく考える」「似た問題と比べる」「わけをはっきりさせる」「ほかの場合も考える」、5年生・6年生では「簡単な場合で考える」「いつも言えるか考える」「結びつけて考える」「広げて考える」など、数学的な思考について分かりやすい言葉で示している。数学的思考の土台となる規則性、類推、法則、演繹、帰納といった部分につながっていくわけだが、それらを正しく伝えるために、順序、比較、条件、例示などを言語で表現する力も磨く工夫がされているように思った。

小学校6年生ではこれまでの学習の振り返り、「開け！算数ワールド」では中学校の数学を意識させて、「続きは中学校で」とつなげているあたりも小中のつながりを意識していると思う。

B者であるが、何々を考えようという目当てとまとめ、これが明確で児童生徒にも分かりやすいと思った。練習問題や挑戦問題など、進度に合わせて活用できると思う。小学校6年生の巻末、学びのサポートには、事前の準備問題、練習問題があって展開できるようになっている。「広がる算数」では、算数が世の中のどんなことに役立っているのかについて、アート、音楽、スポーツ、古生物、お菓子との関係について分かりやすく紹介していて、生徒の興味の中で算数の意味を理解させることができるよ

うに思った。

また、巻末の算数資料集であるが、分かりやすく説明することと、友達のをよく聞くという、理科教育でも焦点化されているようなことがここでも繰り返されている。順番を説明するのに、「はじめに」、「次に」、「まず」。理由を説明するのに「何々だから何々です。そのわけは何々だからです」など論理的な思考を言語で表現するための学習が意識されていた。ノートのとり方、プログラミング的な思考学習などの提案もなされている。

C者である。1年生の上巻が「さんすうのとびら」となっていて、ワークシート型になっており、ノートが不要である。下巻からノートを使う状態であるが、小学校最初の入り口としては無理のない導入になっているのではないかと思った。問題となる目当て、そして次に活動、そしてまとめの流れが明確である。問題が分かりやすく上段に示されるレイアウトになっている。一方で、まとめの重要ポイントに赤い下線が引いてはあるが、もう少し目当てとの区別が明確だとうれしいなと思った。それから、巻末の補充問題、これは児童が自主的に利用できるようになっていた。

また、6年生の巻末には6年間の復習、「おもしろ問題へチャレンジ」もついていて、自ら学習を発展できるようになっている。

D者である。こちらも、目当て、活動、発見、まとめであるが、発見が明確で内容が分かりやすくなっている。いろいろ重要そうな部分にたくさんのハイライトがなされている。「算数まなびナビ」では、算数を紙と鉛筆の世界にとどめず、言語活動につながる方法論の提案がなされている。小学校6年生では「なるほど算数教室」があって、単位のまとめや日本独特の単位、世界の単位、世界の時刻など、興味を引くトピックの特設コーナーがあって、これも児童たちが興味を持って見ることができるのではないかと思った。

小学校1年生への導入部分や、「数学の世界へ」で中学校1年生とのつなぎなどが意識されていて、どちらも学習移行に留意されていると思った。

E者は内容の提示、また構成のパターンが大変分かりやすい。また、紙の色、フォント、余白が大変目に優しく落ち着いている。教科書は情報量が多いので、通常は、それを子どもたちに効果的に伝えるためには、色、記号、イラストなどがそれぞれ多くなる。すると、視覚刺激が交錯して特にどこが重要なのかというところが逆に分かりにくくなるということもある。この点について、E者ではその情報をむしろ捨象することによって重要な点が大変分かりやすくなっていく。また、余白に書き込みをすることができる。目当てとまとめが分かりやすいなどのよい点があると思った。

トピックに、一番基本的な部分のシンプルな問題があり、それを解くためのヒントが分かりやすく書かれており、いろいろな問題へ続き、「できるようになったこと」ということでたくさん問題があって、応用的に解くことができ、そして補充問題へ行くことができる。次に、生活に生かすための深い学びにつながるといったように、基本から応用、展開、そして生活へという流れが分かりやすかった。また、図表、図形を書き込めるようになっていたり、補充問題が適量で用意されていたりということも自主学習、家庭学習に役立つのではないかと思った。

6年生には、算数で見つけた考え方、また、「中学校へのかけ橋」から成る別冊がついていて、単位のこと、数的・量的概念のこと、論理的説明のこと、データのまとめ方や示し方など、改めて小学校算数の振り返りを行っている。中学校の数学への移行

も意識して提示されていた。

F者であるが、目当て、活動、まとめのパターンが示されている。そして巻末の折り込み付録は使い出があるなど思った。また、「分かっているかな」「間違いやすい問題」のポイントがあり、その取り上げは大変ありがたいと思う。不確かな場合に教科書のどこに戻っていくかということについても明示されていて良い。各学年に算数で使いたい言葉や考え方がついていて、算数的な見方や考え方、伝え方を教えている。各学年の巻末に折り込みの付録がついていて、これは本当に児童が喜びそうだなと思った。使われている色もきれいである。

6年生には、今まで学習したことを使って調べたり考えたり話し合ったりしようということ、「マテマランドを探検しよう」のページがあった。こういったことも展開していく学習に使えるのではないかと思ったところである。

教 育 長 中村委員、いかがか。

中 村 委 員 まず、A者である。1年生において、絵を見て話すということや「問題をつくってみよう」など、自分の言葉で伝えるという主体的な活動ができるように工夫されていて、その後の学習や他の教科の学習にもつながるように配慮されているなど感じた。「はてな?」「なるほど」「だったら」というステップで学習が展開していき、子どもたちが主体的に、そして対話的に学べるように、こういう部分もとてもよく工夫されていると思っていた。

自分で取り組むページが巻末に設定されていて、問題数もとても豊富で、自主学习、また家庭学習において自分で取り組めるという工夫がなされていて、こういったところは学習の定着にもつながっていくと感じた。また、巻頭に「算数を始めよう」「学習の進め方」という部分が2年生から6年生に一貫して記載されていて、内容はほぼ全部同じである。ただ、学び方の基本がここできちんと、毎回学年初めのスタート時に確認できるのはとてもよいことだと思った。その中に話し合いの方法や、ノートのとり方などもきちんと掲載されていて、子どもたちはまた新たな気持ちでここから1年スタートできるのではないかと思う。

B者である。単元の導入に日常生活の様子が取り入れられていて、子どもたちの興味・関心を引き出して学習にスムーズに入れるように工夫されていると思う。巻末に「学びのサポート」があり、「準備」「もっと練習」「算数資料編」として、振り返り、学習内容の定着、そして算数問題を解くときのヒントなどが示されていて、しっかりと学びをサポートして、そして自主学习、そして知識の定着などにも役に立つものになっているなど思っている。

算数が実際に社会生活でどのように役立っているか実感しにくいものではあるが、これは一体どこで使うのかと子どもによく聞かれたりすると思うが、6年生では様々な職業を取り上げ、算数の学びが実社会で役立つことが実感できるようになっている。こういったところで、子どもたちのキャリア教育にもつながるような形になっていると思った。

また、3年生の重さの単元では、はかりの読み方や使い方がとても丁寧に示されていて、理科の学習と関連できるように工夫をされていると思った。そして文章の改行は意味の区切りで行っていて、とても読みやすい配慮がなされていると思う。

C者である。1年生のスタートの部分は別冊になっていて、A4判と大きく、直接書き込める形となっていて、無理なく導入でき、子どもたちもノートのとり方の参考

などにもできるのではないかと思った。そして「今日の深い学び」と題したコーナーがあり、ノートのとりの工夫とか自主学習のヒントにもなり、主体的な学習ができるように工夫されていると思う。気温の変化や作物の収穫量などの内容が取り上げられており、他教科との関連も図れるように配慮がなされていると思った。

そして2年生の九九、ここはつまずいたりすると思うが、最後のところに認定証があることで励みにもなると思う。そして巻末に補充問題が大変多く掲載されており、家での自主的な学習にも役立つし、また、チャレンジ問題もあり、さらに学習を広げられるようになっている。6年生の最後には卒業旅行と題して、中学体験入学コース、国際コース、和算コース、クイズ・パズルコースなど、楽しんで学習ができるような工夫が大変よくされていると思った。

D者である。巻頭に「算数まなびナビ」があり、話し方、聞き方、学び合いの仕方などが示されることで、対話的な学びや言語活動ができるように配慮されていると思う。そして、巻末には「プラス・ワン」や「チェックアンドトライ」など、これまでの学習の振り返りや定着度合いが測れるような問題、そして発展的な問題が多く掲載されており、自主的な学習ができるようになってとても良いなと思っていた。そして、単元の間や巻末に「なるほど算数教室」というものが入っていて、算数を生かした仕事をしている人のインタビューや、世界や日本の歴史を数学的に考えるなど、子どもたちに興味・関心を持たせる工夫がなされていると思った。

そして全学年1冊ということで、1年間の学習の見通しが立つのではないかと思う。

E者である。6年生の教材の別冊に「中学校へのかけ橋」として、一部中学での学習内容に触れることで、小学校から中学校へスムーズにつながられていくように配慮されていると思った。そして2年生以上は、上巻の表紙の裏には「みんなのまちの算数」、そして下巻の表紙の裏には「数えたい、まとめたい」として、身近な事柄から温暖化など、世界的な問題を取り上げていて、広く社会に目を向けるための工夫がなされていて、他教科とも連携していて、ここはとてもほかのところにはないような工夫がなされていて、私はとてもいいなと思った。写真もとてもきれいに写っていて、温暖化などは本当は問題であるが、きれいな写真に見とれてしまった。

そして、「知りたいな」「表したいな」「確かめたいな」など、やるべき学習の内容を子どもたちの言葉であらわすことで主体的な学習ができるようにと配慮されていると思う。判が大きくゆったりした感じがあり、落ち着いて学習に取り組み、見やすい工夫がされていると思った。

F者である。1年生の初めに、幼稚園の様子が写真で多く掲載されていて、幼保、小の接続がスムーズにいくように配慮されていると思った。単元の前に「次の学習のために」として、その単元に関連した、以前学習した問題を載せることで、これからの学習にスムーズに入っていけるように、そしてまた、忘れていたところを思い出させるような工夫がなされていて、これはとてもいいことだと思った。そして、それがどこの学年なのかということも明示してあったので見付けやすい工夫になっていると思う。また、「なるほど算数」や6年生の「マテマランドを探検しよう」では、日本や海外の歴史的に算数に関わる伝統や文化に触れていて、興味・関心や親しみを持てるように工夫されていると思った。

教 育 長 里村委員、いかがか。

里 村 委 員 まず、A者であるが、毎時間の学習と単元のまとめ、家庭学習という、各段階での

習熟を図る練習問題が豊富に用意されているということが特色である。それから数学的な見方を身に付けるために「算数のミカタ」を設けて、いろいろな工夫がされているということである。

非常にいいと思った点であるが、1時間の授業のノート例とか複数の考え方を見える化した友達のノートを例示するという一方で、いろいろな角度から数学に対する理解を深めさせる、そういう試みがされているということである。全体的に非常によい構成になっていると思う。事務局の方からもお話があったが、4コマ漫画を活用して興味や意欲を引き出すという工夫もされていると思う。誌面の制約のこともあり、もう少し大きかったらなおいいなとは思ったが、いろいろな工夫がされているということである。

B者であるが、既に習ったことを振り返る準備とか、学習したことの定着を図るという「もっと練習」といううまい立て付けによって、基礎的な学習がしっかり身に付くように工夫されていると思う。

それから、巻末の「学びのサポート」は、児童一人一人に応じた理解度が必ずしも一緒ではないということも含めて指導するように活用できるのではないかと思う。

もう一つ、巻末に算数資料集があるが、説明の仕方とか図の表示、そういう方法を学ぶことにより、数学的な見方・考え方をより容易に身に付けられるような工夫がされていると思う。

仙台市の自分づくり教育の一環としての様々な職業を取り上げて、算数で学んだ内容が社会で役に立つのだということを実感させるような工夫もされている。

C者である。C者は、数学的活動に基づく問題解決を促すということかと思うが、算数を学びながら思考力とか判断力、表現力を伸ばしていこうという試みを感じる。算数を教えることにとどまっていなくて、特長があると思う。また、気温の変化とか作物の収穫量などの内容を盛り込み、教科横断的な学びにもつながるような配慮がされていると思う。

もう一つは、児童の学習意欲を十分に育てよう、醸成しようという強い企画の意図が感じられ、内容が非常に充実していると思う。例えばノートの記録の仕方についてもページが充実していて、ガイダンスが非常に丁寧になされていると思う。

D者である。ここは私なりに解釈すると、一人で学ぶのではなくて、学び合いで算数の授業を受ける、考え方を伸ばすということに力点があるように思う。具体的には「まなびナビ」ということで、算数における学習形態を示しながら、他の児童と一緒に学び合うことを通じて算数的な思考・見方を深めていく方向の編集だと思う。

1年生から6年生まで、他者と違って上下巻を設けず、学年1冊の格好にしている。算数は積み重ねが大事だという観点からであろうか、既習の学習を上下に分けずに振り返ることをしやすくしている配慮だと思う。プログラミングのページを全学年に新設していて、これは新しい学習指導要領の考え方を取り入れたと思うが、発達の段階に応じて算数に関連した内容になっていると思う。

E者である。ここは給食のメニューとか体力テストなどのデータを題材に取り上げていて、算数という大上段に構えないで、身近なところから算数を学べるように編集しているということで、身の回りの日常的な事柄に問題を設定することで数学的活動に児童が主体的に取り組むような配慮がされているように思う。

それから、基礎的技能が身に付きやすいように、グラフとか図形を直接書き込める

スペースをふんだんに設けているというところも特長かと思う。

「中学校へのかけ橋」と題する別冊があり、中学校の内容に一部触れることによって、小学校を卒業した後のスムーズな接続ができるような配慮がなされていると思う。

F者であるが、ここは1年生に入るとき、最初に口絵が5ページもついていて、幼稚園児の生活の様子を写真で示しながら、スムーズに円滑に接続する意図がうかがわれる。片方でまた、高学年であるが、中学校数学科との題材の関連性に意を配った編集になっていて、小学校の算数の入り口と、それから中学校に向かうところの入り口、出口に接続性を強めるような編集になっていると思う。

併せて、取り扱う素材であるが、あるいは場面が他教科との関連の深い教科等横断的になっている。これを積極的に取り上げて、広く児童の興味とか関心を促す内容になっていると思う。F者は、入り口のところで中学校に向かうところの接続を非常に配慮した、それから取り扱う素材が他科との関連を深いものをとっていることが特長だと思う。巻末に「しっかり」マークを設けて、基礎的・基本的な内容について、きちっと理解が進むような工夫もされているということである。

教 育 長 吉田委員、いかがか。

吉 田 委 員 子どもたちが算数の授業において主体的・積極的に関わるということは、やはり数学的な事象について分かることと問題が解けるようになることが一番の基となることかと思っている。そういう点で話をさせていただく。

まず、全体的な配慮についてである。低学年では、日常の生活場面にありそうな出来事をもとに問題文を作成しており、算数学習への興味・関心を高める工夫がなされている。学年が上がるにつれて次第に数学的な抽象概念に近付けていくような導き方をしているのが、全ての者で行われているなという印象を受けた。

続いて、各単元の学習へのレディネスとして、関連する話題等を提示してのウォーミングアップを図ろうとしているのがA者、B者、D者かと思う。また、レディネスに関して、既習事項の関連を通して行っているのがC者、F者かなという印象を受けた。さらに、学びの中で、それから学びが終わったところで、汎用的な力を身に付けさせるためにさまざまなキャラクターを登場させているわけだが、それについてはどこの者も行っている。その中で、適切な量と内容だと感じられたのがA者とE者である。それでもキャラクターの登場は多いかなという印象を持っている。

続いて、算数の学習で既習事項の理解度ということに左右されることがあるわけだが、巻末などで既習事項が確認できるのがA者、B者、C者、D者、E者である。特に活用しやすい印象を持ったのがC者とD者である。また、単元の扉に既習事項等に触れる機会を設定しているのがC者である。そして、学年が上がるにつれて数学的用語というか算数的用語を用いて学習することが多くなるわけだが、そのために用語確認の索引が提示されている。これは全ての者で行われているわけだが、特に見やすく活用しやすいと思われたのがA者、B者、C者、F者である。

次に、仙台市の標準学力検査に関係することである。標準学力検査において、たびたびそれぞれの学年において応用力が目標値に達していないことがあった。その背景の一つとして、数学的思考に課題があり、そのことに深く関わる「割合」に関する理解が影響しているのかなと思われる。このことについては、多くの児童たちが割合に関する学習が算数科の大きな壁になっていることも事実かなと受け止めているところである。そういうことで基準量や比較量、割合の関係を確かにとらえさせるために、

各者とも数直線の描き方、考え方を特別視して、理解のためのさまざまな手立てを講じているが、その中で数直線について2ページを費やして丁寧に解説しているのがB者、C者、D者、F者である。また併せて、図式化と関連させて取り扱っているのがB者、C者であった。

続いて、割合の3用法を4年生は整数、5年生は小数、6年生は分数と、単元内に全者が確かに位置付けている。中でも編集に工夫があり、しかも3年生から倍の数、倍の計算として確かに取り扱っているなという印象を受けたのがB者、C者、D者であった。割合に関する学習を2年生から分数ということで、今回の学習指導要領から行われるようになってきているが、もちろんこれについては全ての者が分数を位置付けている。その中で、3年生で分数を数量としてだけでなく割合としての基準量として認識を促しているのがC者である。A者も脚注で取り扱っている。続いて、割合の関係をとらえやすくするために、4ますの図式化で分かりやすい手だてを講じているのがE者である。

以上、総合的なこと、それから割合に関する編集内容について申し上げた。

教 育 長 花輪委員、いかがか。

花 輪 委 員 算数であるが、数字を用いた計算をしっかり行うことができること、図形の性質を理解すること、統計的な考え方ができることなどの数学的素養、さまざまな素養を涵養して、さらにそれを日常的な場面で応用できる力を養うことを目標としていると思う。1年生から6年生まで学ぶ教科であり、今回6者の教科書が提案されている。それぞれの者がそれぞれの者の考え方で工夫して教科書を編んでいると理解した。

まず、A者であるが、B5判、9分冊、総ページ数が1,680ページ、この分量は平均的である。学習の進め方、基本的に全者実は同じである。問題をつかむ、自分の考えを持つ、みんなと話し合う、振り返る、こういう順序でなっている。

それから、吉田委員の中にも出てきたが、各者ともキャラクターを導入している。そのことについて触れさせていただく。

この者は、どんちゃん、ぐりちゃん及び4人の児童生徒を登場させている。学習のてびきの補助ということで、私は学習指導補助という名前呼びたいが、それを担わせている。このキャラクターにどこまでその役割を担わせるか、かなり各者で違うような印象である。これは比較的大事なポイントかなと思う。この者は比較的多くの場面で登場させて、児童に対して働き掛け、呼び掛けを行っている。

それから、単元の最後に「学んだことを使おう」で応用問題にチャレンジして、「振り返ろう」で復習をして、さらに「たしかめよう」というのを設けて、再度問題を解くという順序にしている、学んだことの定着を図っている。巻末には、これも各者同じであるが、まとめ、あるいはいろいろな名前と呼ばれるが、算数に関する情報・知識をまとめたものを置いて、もっと学びたい、あるいはしっかりと定着させたい、そういう自学自習を促すような工夫をしている。フォント、式の配置、ページのデザイン、これが優れているのだろうと思うが、見やすい教科書になっていると感じた。

次にB者である。これはB5判で、9冊の分冊になっている。総ページ数は1,670ページで平均的である。教科書には、えんぴつくんと4人の児童を登場させて指導の補助をしているが、控え目、抑え目の印象を持った。単元の中、あるいは単元のまとめも含めて、他者に比べて問題を多く設定しているのが特長ではないかと思う。巻末にもかなりのページ数を割いて、学びのサポートを設けている。この中で「準備」「も

つと練習」「算数資料集」などがあって、自学自習ができる構成となっている。

それから、加藤委員もお話しされたが、6年生の教科書の巻末に「広がる算数」という欄を設け、6人の各界で活躍されている人を登場させて、いろいろなところで数学の考え方は役に立つし、必要であると訴え掛けているのは大変秀逸のアイデアだと思う。この教科書も非常に見やすく仕上がっている印象を受けた。

C者である。皆さんご指摘のように、1年生の最初の1の①、分冊がA4判である。これは非常に素晴らしいアイデアではないかと思う。総ページ数は1,640ページで平均的である。この者にはマスリンクンと児童数名が出てきて学習指導補助をさせているが、出番はそんなに多くないという印象であった。「今日の深い学び」のコーナーでグループ学習の仕方を紹介しているのは参考になる。また、その単元に関する事項が、前の学習、今まで習ったどこに出てきているか、あるいはこの後、どこに結び付くか。「中学校に結び付きますよ」というような書き方であるが、これを出しているのは大変よいアイデアである。目次の中に示されている。この者と次のD者のみがこれを扱っている。

これも指摘されたが、「今日の深い学び」としては、「マイノート」のコーナーを頻繁に設けていて、ノートをとることの大事さ、とり方の例示を示しているのは大変いい工夫である。各学年の巻末には「新しい算数プラス」ということで、さまざまな問題を解かせているのはよいことだと思う。また、6年生の教科書には「算数卒業旅行」が設けられて、中学校との接続を工夫している。

D者である。これは各学年1冊、計6冊である。里村委員お話しされたように、1冊で1学年全部カバーするという考え方だと思う。総ページ数は1,530ページで、6者の中では一番少ない。この者は、ラビちゃんと6人の児童を登場させて学習指導の補助をさせているが、登場場面は他者に比べてかなり少ない。そのためということもあるだろうと思うが、キャラクターのイラストが入らない分、教科書全体が落ち着いた雰囲気を醸し出していると思う。

各単元の問い掛けのところが網かけになっている。四角でくくったりといろいろな工夫を他者でもしているが、大変分かりやすいと思う。各単元が始まる前に「新しい学習がはじまるよ」と題して、次にどのようなことを学ぶのかの導入を図っていることは、学びのモチベーションを上げる意味で大変いいと思う。

先ほど言ったC者と同様、これから学ぶ単元がこれまでのどこと関係して、これからのどこと関連するのかを示しているのが特長である。

E者である。唯一、A4判を採用している。6年生が「中学校へのかけ橋」という小冊子があるので合計12冊である。総ページ数が1,730ページということで極端に多いというわけではないが、一番多いページ数になっている。

学習の進め方は、これはいずれも同じだと言ったが、少し言い換えて、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」と言っている。対話的な学びを進めるために幾つかの単元に、そう多くはないが、「話し合いたいな」「説明したいな」などの場面があり、指示を出している。他者より大判だけに余裕、余白が適当にあり、読みやすいとの印象を受ける。キャラクターの名前は付けていないが、先生と4人の児童を登場させている。出番は多いというわけではない。「ノート名人になろう」というコーナーが各学年複数回出てくる。ノートをとることの大事さとそのノウハウを示しているのは大変いいと思う。各単元の前には「?を発見」として、次の単元で行うことを

意義付けさせているのが、学びのモチベーションを得るのに大変望ましい。これはD者も同じであったが、そのように思う。

各単元末には「できるようになったこと」「学びを生かそう」を配置し、身に付けた力を確認するとともに、応用力も付けようという工夫がなされている。巻末には補充問題があり、復習を促している。

6年生の小冊子「中学校へのかけ橋」は、何度もほかの委員が指摘されたとおりで、中学校への接続を考えている。

F者である。B5判で、11分冊、総ページ数1,680ページで、平均的な分量かと思う。この者の教科書の使い方は非常に明瞭であり、各単元で事前学習、学校での毎日の学習、学習の確かめを行うという系統的な構成がずっと貫かれている。その単元の間に、ところどころであるが「学んだことを使ってみよう」「学びをつなげよう」で、応用力を養うことを目指している。

各学年の教科書にはキャラクター、リスと思われるクリンと6人の児童を登場させて学習指導補助をしている。登場場面はそう多くはない。そのため教科書全体が落ち着いた雰囲気になっていると思う。単元には「なるほど算数」のコラムを入れて、学んだことが身近なところで使われていることを紹介している。

6年生の教科書の最後に、ちょっとびっくりしたが、加藤委員もお話しされた「マテマランドのコーナー」があり、20ページにわたり漫画で、算数が身近なところで重要であり、大事であることを訴える内容となっている。なるほど、漫画というのは強烈なのかと感心した。

教 育 長 皆様から各発行者の特長についてご発言をいただいた。小学校算数については6者から提示があるので、絞り込みを行っていきたいと思う。各委員の皆様方、ご自身が推薦する発行者3つ挙げていただき、私のほうで集計し、絞り込みという形で次の議論を進めたいと思う。

阿子島委員から順に、3者お願いする。

阿子島委員 A者、C者、E者を推薦する。

加藤委員 B者、C者、E者になる。

中村委員 A者、C者、F者を推薦する。

里村委員 A者、C者、E者である。

吉田委員 B者、C者、F者である。

花輪委員 B者、C者、D者である。

教 育 長 そうするとC者が6、A・B・Eが3という数字でよろしいか。

本来であれば3者に絞り込みたいと考えていたが、2番目の数が三つあるので、6者のうち4者に一旦絞り込みをし、それからまた皆さんと議論を進めていききたいと思うが、こういった形でよろしいか。

(異議なし)

それでは、A者、B者、C者、E者、この4者で議論を進めていきたい。様々皆さんから意見をいただいた中で、各発行者の工夫なり考え方が示されたが、最終的に1者に絞り込みするわけだが、この4者について何か確認したいことはあるか。

(質疑なし)

ないようなので、絞り込みの段階で、どの発行者を最終的に1者に絞り込んでいくかということで、委員の皆様方からまたご意見をいただきたいと思う。どなたか、こ

の1者ということでご発言いただければと思う。

里村委員 なかなか迷うが、こういうとき、私は現場の先生方の意見がどういうものか聞きたいところである。結果を数字で示すのは難しいのかもしれないが、現場の先生の意見を尊重するというのを大事にしたいと思う。個人的には、6人の委員が皆推薦したC者、それがよろしいかと思うが、現場の意見がどうだったのかというところが気になる。

それから、協議会の議事録を読ませていただいているが、C者については、3年生の下のところ、大きなつまずきが算数では多く見られるようで、特に倍の考え方が子どもたちにとって難しいようである。そういうところを見ると、C者の教科書を見ていただくと分かるが、3年の下と4年の下だったかに特設コーナーをつくってあり、そら豆のマークで書いてあるが、子どもが壁にぶつかるようなところをきちっと配慮して特設で設けて編集するという積極的な考え方も大いに賛成できることではないかと思う。そうしたことで、学校の先生方のご意見がどうなっているのかを確認したい。ご意見と齟齬がないようならC者がいいのではないかと思う。

教育長 C者を推す意見をいただいた。絞り込みをした4者あるいはC者について、特長的な部分をお話しいただきたいと思う。

教育指導課長 冒頭、それぞれ特長的なことについては担当指導主事からお話し申し上げたが、今挙げられたA・B・C・E者、共通して現場からここがすぐれているという声としては、主体的な学びを促す上で工夫されている。例えばA者に関しては、先ほども挙げられたが、「はてな」「なるほど」「だったら」、それからB者に関しては「学びのサポート」あるいは「自分の力で」のマーク、C者に関しては「今日の深い学び」、E者に関しては「調べたいな」「知りたいな」「やってみたいな」といった働き掛け、工夫により主体的な学びを促すという点で優れているという声が寄せられている。C者の教科書に関しては担当指導主事からお答え申し上げます。

指導主事 それでは、C者の倍についてのご説明をする。

協議会の報告にもあるとおり、3年生の下巻に倍の計算、4年生の上巻に倍の見方、5年生の上巻に小数の倍、6年生の上巻に分数の倍ということで、3学年から倍に関する単元を設定しているということで、そのようなところで協議会のほうでも話題に上がっていた。

教育長 そのほかに委員の皆さんから、一番という推薦の言葉をいただきたいと思う。

吉田委員 里村委員の言葉に関連するが、私も先に申し上げたように、子どもたちが算数をできなくなる、分からないという壁は、「割合」という言葉でくくってはいけないかもしれないが、今出た倍の数とか、いわゆる割合関係がイメージできないというところにあるという認識を持っている。

そういう意味で、3年生から分数を単なる数量的でなく割合的位置付け、基準量として学習の中にしっかりと位置付けている。4年生、5年生とステップアップしていくという編集内容を示されていたのがC者であった。そのようなことからC者と考えている。

教育長 そのほかに委員の皆さんからご意見いただければと思う。

加藤委員 私もC者を挙げているので、それでよろしいと思う。ただ、花輪委員も取り上げておっしゃったが、キャラクターが問いに関して何をコメントしているとか、次々に出てきているいろいろな感想を述べるということが、問いを発見して自分でやってみるとい

う点にどのように作用するのかわかりません。そういう意味で、やや保守的であるが、与えられた基本的な問題に集中できることはとても重要だと思っているので、C者がややキャラクターが多く登場しすぎるといった感想はある。ただ、未知数なので、これが児童たちにとってどうなのかわかりません。授業の中で、目当てとまとめが時間の中ではっきりしてくることは教員にとってとてもありがたいことだが、その点では、目当てとまとめが同じ色で毎回示されてくるので、ここはむしろ、さっきとは逆の言い方であるが、強調して別の色にさせていただくとか、はっきりさせていただくと良かったのかなという注文はある。

しかし、内容的に問題があるわけではないし、たくさんの補充問題をその場でたくさん解いていくことができるような教科書としても使われている。何と言ってもマイノートは本当によくできていると思う。ほかの者についても同じようにノートのとり方を学ぶページがあるが、算数はなかなかノートが作りづらい教科書でもあるので、そういう意味で注意を向けることができるかと思う。

教 育 長 ほかの委員の方はいかがだろうか。

阿 子 島 委 員 私も今挙がっている4者、いずれも素晴らしい教科書だと思う。

A者は6年生で「開け！算数ワールド」、B者は発展問題で「算数パスポート」、C者は最後に「算数卒業旅行」、E者も中学校へと続く発展問題が記載されているなど、それぞれ特長があって甲乙つけがたい。本当に迷うところだが、算数・数学を一番に考えて、それを自分で可視化してノートにきちんと書いて、また後で復習して見直せるマイノートの記載と、九九認定証などがついているのも子どもたちが楽しいと思うので、C者を推薦したい。

中 村 委 員 私も、A者、B者、C者、E者それぞれいいところがあって、A者の自分で取り組むページというのは本当に問題数も豊富なのでいいと思ったし、B者の「新しい学習が始まるよ」とか「学びのサポート」も、とてもしっかり子どもたちをサポートできるような形になっていると思う。

E者であるが、E者も「中学校へのかけ橋」ということで、一部中学校の内容を触れるということ、それぞれいいところがあると思う。

私もC者を推薦したいと思うが、1年生のスタートの部分、本当に最初につまづかないように、ノートのとり方であったり書き方であったりが、自分でつくと時間が掛かってしまってなかなか進まないことがあった場合、C者だと書き込める、そして先生も無理なく子どもたちに指導ができる、そしてそれを書くことによってノートのとり方の参考にもなるということ、スタート時から算数が楽しいものとして学んでもらえるのではないかと考えてC者を推薦したいと思う。

花 輪 委 員 私もC者を推したい。各委員がお話しされたことと全く同感であるが、キャラクターを出し過ぎて発言させ過ぎているのではないかと危惧はあるが、そのほかの点は非常にしっかりつくられた教科書だと思う。いろいろなところに配慮ができていて、特に1年生の最初の判がA4判でワークシート形式になっているのは出色だと思う。学年が上がるに従っても、ご指摘あったように、いろいろなところに配慮されたいい教科書になっていると思う。

教 育 長 絞り込みを行い、皆様方のご意見をお聞きした中では、C者を推すということではほぼ一致していると受け止めているので、小学校算数はC者ということでよろしいか。
(異議なし)

それでは、算数については、以上ご議論いただいた内容を採択理由として事務局に整理してもらい、26日に最終的に決定したいと思う。

【家庭】

教 育 長 次に、家庭について協議を行う。

事務局から、学習指導要領の目標等について説明をお願いします。

教育指導課長 担当指導主事よりご説明する。

指 導 主 事 小学校家庭について説明する。

小学校家庭では、生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、生活をよりよくしようと工夫する資質・能力の育成を目標としている。

新しい学習指導要領では、家庭に関して、家族・家庭生活の多様化や消費生活の変化等に加え、グローバル化や少子高齢化の進展、持続可能な社会の構築等、今後の社会の急激な変化に主体的に対応できる資質・能力の育成を目指すという趣旨で、目標及び内容が改訂された。

内容構成については、小学校、中学校、高等学校の内容の系統性を明確にし、小中学校においては各内容の接続が見えるように、A、家族・家庭生活、B、衣食住の生活、C、消費生活・環境の3つの内容とされた。

協議会において取りまとめた小学校家庭の全発行者の特長は、別紙資料2、報告の別紙1の10ページにお示ししている。

主な特長については、まずA者は、他教科との学習、日常生活のつながりに配慮が見られ、日本の伝統食を取り上げ、家庭や地域の味・技などを理解し、身に付けられるように配慮されているということである。

次に、B者は、「話し合おう」「深めよう」を設けることで、言語活動が充実するように配慮されているということである。

教 育 長 ただいまの事務局の説明について、何かご質問等があればお願いします。

(質疑なし)

特にないようなので、各発行者の教科書見本本についてご意見をいただきたい。

最初は阿子島委員からお願いします。

阿 子 島 委 員 どちらも内容が見やすく、子どもたちに分かりやすい教科書という印象を受けた。

まず、A者からお話しさせていただく。A者は、初めに「これまでの学習を家庭科につなげよう」と記載されていて、新しく始まる家庭科が全ての教科に関連していくことが理解できるようになっている。目次には、生活の見方・考え方、4つの視点と「生活を見つめ、できることを増やしていこう」「くふうして生活に生かそう」と、2年間の学習テーマが記載されているし、家庭科学習の進め方が載っている。

また、最初に「安全に実習をしよう」と、調理や製作の実習をする際、安全に気を付けること、地震や災害が起きたときの注意点が書かれているのがよいと思う。

さらに、76ページからの「レッツ・トライ 生活の課題と実践」は、他教科の学習ともつながるし、「ミシンでソーイング」の中で、衣装製作に関わる人としてフィギュアスケートの衣装製作者や、「共に生きる地域での生活」では障害者スポーツ、ブラインドサッカーの普及に関わっている人が紹介されているのは、いろいろとキャリア教育にもつながると思われる。

なお、「共に生きる地域での生活」では、「地域に住む様々な人々に触れ合い、地域の一員としてできることを増やしていこう」「地域との関わりを見付ける視点」などが記載されているのもよいと思う。そして2年間の学習を振り返って中学校での学習に生かそうとチェック項目が記載されていたり、中学校の学習内容が掲載されているのも特長的だと思う。

最後に、私たちの生活の中での伝統文化や、ソーイング時の左利きの場合が掲載されているのもよいと思った。

次に、B者である。こちらは初めに「家庭科はあなたの生活をよりよく変えていく教科です」と書かれていて、今まで学習してきたことが全てこれからの家庭科学習につながっていくことが分かりやすく記載されている。そして、5・6年生で学習したことを振り返る成長の記録や学習の進め方が載っている。「生活を変えるチャンス！」では5回、家庭科で学んだことを家族や家庭で実践する際の進め方が解説してある。

また、39ページの資料2では、品質についてのマーク、環境についてのマークが掲載されているのがよいと思う。さらに、各場面で「プロに聞く！」が掲載されているのはキャリア教育にもつながってよいと思う。

「あなたは家庭や地域の宝物」のところでは、家族や地域の一員として今自分がどのように生活しているのかを考えたり、「私から地域につなげよう！広げよう」では、家族や地域の人々と協力して生活するために必要な工夫について考え、実践していくことが記載されているところもよいと思う。

最後に、「安全に学習しよう」では、調理実習の時の手の洗い方から製作実習の時に注意する点、地震が起こった時の注意点などが掲載されているのもよいと思った。

教 育 長 加藤委員、いかがか。

加 藤 委 員 まずA者である。最初に小学校に入学以来、学習してきた教科と、今からやろうという5年生の家庭科の関係、つながり、これを児童に紹介できるようになっている。その進行はもちろん教師に任されているわけだが、ここは家庭科を学んだ後の振り返りにも使ってほしい重要な部分かと思った。

実習等の安全について、危険な場面を組み込んだ図を示している。こうしてはいけません、こうしましょうという注意喚起だけではなく、児童が自ら危険や気をつけなければならない点について、図から探し出すことで印象に残るような工夫がされていると思う。

また、単元の最初に学習のめあてが大変明確に示されており、手順も写真等で大変的確に示されていると思う。「できたかな」の小さなチェックがそれぞれにあるが、そこに書かれているポイントについても大変的確かと思った。

B者である。A4判で大きなサイズである。この点については、実際の授業場面でどのように使われるかが分かりにくいところだった。実習時に広げて見開きA3というのは授業進行上、無理はないのか。ただ、もしかすると実習には持っていかないで、事前準備で学んで、実習は実習でやるのか、その辺の教科書の実際の使い方が分からなかった。ただし、逆に大判になっていることで実習の手順が見開きで一目で見えていける。また、例えば野菜をゆでるところを見ても、洗う、ゆでる、切るで終わらずに、盛りつける、試食する、片付けるまでの情報を含み込むことができる、一連の流れをトータルな総合的な学びの中で示すことができるということがメリットであると思った。

また、目当てと振り返りについても明確に示されていると思う。手順の見せ方が分かりやすく、写真も大変美しいが、付随した情報も多彩、家庭科がさまざまな教科と近接領域にあることが感じられるつくりになっていると思う。

また、「プロに聞く!」「日本の伝統」のコーナーは、読み物としても大変楽しくおもしろく読ませていただいた。

教 育 長 中村委員、いかがか。

中 村 委 員 A者である。チャレンジコーナーなどでは日本各地の郷土料理や伝統文化を取り上げ、子どもたちが今まで知らなかった地域のことが載っていたりして、興味・関心を高める工夫がなされていると思った。

また、各単元の初めに学習の目安が明記されており、最初の発問が「なぜ〇〇するのだろうか」ということで統一されていて、子どもたちがしっかりと見通しを持って学習ができるように配慮されていると思った。また、関連マークを設けて、他教科や総合的な学習と関連付けて学習が図れるように工夫されている。また、「レッツ・トライ」では他教科と連携している工夫がなされているし、巻末の「私たちの生活の中の伝統文化」では、日本の伝統、そして文化を知り、興味・関心を持ち、伝統を大切にするという気持ちを育んでもらえるのではないかと思っている。

また、中に「調べよう」「やってみよう」「考えよう」と横に書いてあるが、そういうところで学習がもっと横に広がっていくような工夫がされていると思った。

B者である。A4判で大きくなっていて、巻末に「いつも確かめよう」などのところでは包丁など右利き、左利きが大きく示されており、子どもたちに寄り添ったものになっていると思った。そして原寸大の写真を資料に掲載し、実際のイメージを持ちやすくなるのではないかと思っている。

「日本の伝統」コーナーが設けられていて、日本の伝統文化を知るきっかけとなり、子どもたちが興味・関心を持ち、そういうものを大切にすることを大切にする気持ちを持つように工夫がなされていると思った。

また、「話し合おう」「深めよう」というコーナーを設けていて、対話的な学習に対応できるようになっていると思う。

学年の振り返りができるまとめという部分があり、学習してきたことを一つ一つ確認できるものになっていて、それもただチェックではなく、山に登るような感じになっているのが子どもたちも楽しんでできるのではないかと思った。

教 育 長 里村委員、いかがか。

里 村 委 員 この2冊の教科書に書いてあることは、私の人生で全部スキップしてきたものである。

皆さんのご意見を聞きながらであるが、自らの体験が乏しい中で、家庭科という教科について、A者はどうだ、B者はどうだということは、申し上げにくいというのが実感である。

教 育 長 吉田委員、いかがか。

吉 田 委 員 家庭科については各者ごとに申し上げたいと思う。

まず、A者である。児童が主体的に学ぼうとする姿勢をつくるためにということで、まず初めに、題材ごとに学習の目当てに対する振り返りのコーナーが設定されていて、ひとつ自己評価の機会になっていると思う。同じく知識・技能の学習についても評価の場面が設けられている。さらに、各題材のねらいに沿ったポイントになるところで

さらなる働き掛けをして、学習の充実を図っているという印象を受けた。

このように、題材における学習活動の全体を見渡して取り組めるようにしているとともに、要所で家庭的な思考活動をさせ、そして自己評価をさせるという行為を繰り返し行わせることによって、主体的な学びの育成に結び付くような編集がされているということを感じ取ることができた。

続いて、キャラクターの件である。キャラクターの登場による学習活動の促しを少なくしているということで、授業者と児童との関わりの中で授業づくりが進められるという観点から編集されているという印象を受けた。

続いて、体裁に関して、多くのことを盛り込まない誌面構成ということと、適度な色調により記述内容が見取りやすい印象を受けた。さらに、これは横断的学習と関係するが、英語による家庭科用語が巻末に提示されている。ということは、5年生から始まる外国語学習との関連で興味深く受け止めることができた。

続いてB者である。同じく主体的な学びという関連からB者について申し上げると、学習の目当ての設定と同時に、題材全体の学習内容を見通すための手だてが講じられており、さらには、それぞれの学習活動についても各種の活動テーマが提示されるとともに、知識や技能の定着に関するチェックコーナーを設けるなど、主体的な学びに配慮された編集だという印象を受けた。

大きさであるが、A4判という大きなサイズを生かしてたくさんの情報を提示し、児童の学びを広く、そして深めようとしている配慮がうかがえた。あわせて実習の流れなどが一目にして分かるという効果もあると受け止めた。

3つ目であるが、地域社会における自己の位置づけに関して多くのページを割いている。家庭、さらにはそれを発展させて、地域という社会での在り方ということを考えさせることに配慮した編集が印象的であった。

最後に「プロに聞く！」とか日本の伝統に関するコーナーは、発展学習として非常に子どもたちにとっても効果的であるという印象を受けている。

教 育 長 花輪委員、いかがか。

花 輪 委 員 A者である。AB判、各委員ご指摘のとおりで、136ページの教科書になっている。ちなみに、B者はA4判で145ページということで、分量的にB者のほうが多いという印象であった。

A者のほうは5年生で11単元、6年生で9単元、合計20。一方B者は、5年生で8単元、6年生で7単元の計15単元。これはまとまりをどうするかということなので、多い方がいいとか少ない方がいいという問題ではない。

A者の学習の仕方であるが、「見つける」「気づく」「分かる、できる」、この中に「考える」「計画する」「実践する」「振り返る」が含まれている。最後に、「生かす」「深める」という流れである。

既にご指摘あったように、各単元の最初に学習の目当てが示されていて、かつ、最初の問い掛けが「なぜ〇〇をするのだろうか」と、非常に身近な疑問を自分に問いかけてみて考えさせるようになっていて、これが非常に大きな特長かと思う。これは家庭という教科を学ぶ意義を考えさせる上で、モチベーションを持って学習してくださいということに導いているのだろうと思う。

数カ所にチャレンジコーナーを設け、料理や裁縫などで家庭でも実践してくださいと促しているのが特長である。

安全に関する注意事項が多くのところには配置されている。安全教育に力を入れていることが分かる。この者はイラストを多用し、色合いやデザインの工夫もしているのだろうと思うが、教科書全体が優しく、取り組みやすい感じの教科書に仕上がっていると思う。

B者である。学習の仕方は3段階構成、ステップ1で課題発見、ステップ2で課題解決、実践活動、ステップ3で評価改善、そういう流れで構成されている。全ての単元の全てのページで、今どのステップにいるかが例示されていて、学習者にとって分かりやすい構成となっている。各単元では「活動をやってみよう」、あるいは「活動を話し合おう」などの問い掛けがあり、学習を段階的に進めるような工夫がなされている。

多くのイラスト、写真でプロセスの紹介がなされている。学習者はこれらを見て作業を迷いなく進めることができるのではないかな。そういう工夫がなされていると思う。

おもしろかったのは、2年間を通じて5回「生活を変えるチャンス」という欄が設けられていて、各自の日頃の生活を振り返り、正すのであればよりよい生活を築くようにチャレンジを促している点が大変おもしろく、いいアイデアだと思う。

これはA4と大判であり、多くの情報が盛り込まれている。きちんと読めばいろいろなことが学べる教科書かと思った。

教 育 長 里村委員先ほど発言があったが、5年生、6年生の児童にとって、この2者の教科書があるわけだが、子どもたちに興味・関心というか、イラストも含めて学びたいと思わせるという点からはいかがか。

里 村 委 員 非常に温かいご質問をいただいた。

例えば別の科目のように8者ぐらいあって、その中から3つ選ぶということと、この2つが示されていて、どちらかを選ぶのはなかなか難しいところがあるが、どちらがいいというのは多少はある。

教 育 長 家庭については2者の発行者であるので、この2者のうちから1者絞り込みするわけだが、絞り込む前に、改めて家庭科の2者の教科書について再度確認したいということがあれば、どなたでも結構なので、ご発言いただきたいと思う。

(質疑なし)

ないようなので、それでは1者への絞り込みということで進めたいと思う。どなたでも結構なので、2者のうちこちらのほうを絞り込みとして推薦したいというご発言があればお願いしたい。

里 村 委 員 ずっと見ていて、B者の分量がいい意味でも悪い意味でも多過ぎて、内容が充実しているという意味でいいとは思いますが、子どもたちのことを考えて、このぐらいでいいのではないかなという感じがあって、比較論としては、家庭の勉強をしながら生活の仕方を見直すとか変えていくという色彩がやや強いように思ったので、A者の方ということである。

教 育 長 A者ということでご意見があったが、ほかの委員の皆さん、いかがか。

花 輪 委 員 私も全く同じ理由でA者を選びたいと思う。多くの情報が盛り込まれていて、多くのことを学べるのではないかと先ほどは表現したが、余りにも多過ぎると逆に消化不良で、大抵児童生徒というのは教科書に書かれていることを全て受け止める習性を持っていると思う。そのときにB者の情報量は多いなというのを見た瞬間思った。そういう意味では、単元数はA者のほうが5単元ほど多いが、記載内容はほどほどかな。

A者でも多いのではないかという印象を持つので、私もA者を推したいと思う。

教 育 長 そのほかの委員の皆さん、いかがだろうか。

中 村 委 員 A者もB者も、読んでいてとても楽しくて、テーブルの上に置いて眺めていたが、B者の後ろのほうのニンジンの切り方、ジャガイモの芽の取り方、布を縫うところなどは本当に実寸大というか見やすいもので、とても子どもたちの目を引くものでいいなとは思った。ただ、やはり同じように大人の私が読んでも、情報がたくさん入っていて、楽しいものではあるが、これが子どもたちにとってはどうなのだろうかというのは正直感じた。

A者は、花輪委員と同じだが、これでも多いのかとは思いつつも、比較をしたときにA者のほうがより子どもたちにはまだ届くかなという感じがする。

そして巻末にある「家庭科の用語 英語ではどういうの?」というのは、これから英語学習が始まるということに対応できるところもあり、A者を推薦したいと思う。

吉 田 委 員 同じような内容になるが、私は初めB者について、たくさんの情報を提示し、児童の学びを広く、そして深めようとしている配慮と話したが、里村委員、花輪委員と同じようにやはり多過ぎるのかなと思ったところはある。

もう一つ、今までキャラクターが各教科で出てきた。どの者も同じように出てきたから、そのことによる評価基準にはならなかったが、今回2者ということで見たときに、登場回数と親切な発言というのが明らかに違って見えたわけである。そういう意味で、余りキャラクターが登場してこないA者かなと思ったし、かつ配色の関係だろうか、背景となる色をかなり考えているのかと思う。特に運針とかの指先や糸が見やすい色使いをしているということがあって、全体的にもそういう印象を受け、A者がいいかなということも思った。

阿 子 島 委 員 本当にどちらの教科書も、このまま自分で読んでいたい。今本当に世間ではいろいろな実用書が出ているが、この教科書が1冊あれば私もずっと使えるかなと思ってしまふぐらい、詳しくいろいろなことが載っているのもとても楽しかった。

その中で、やはりA者は最後のところに小学校の学習が中学校にどのようにつながっていくのかが載っていたり、巻末に英語の用語の表示が出ている点は、英語科とかいろいろなところにつながっていくので、とてもよいと思った。

B者のほうも大きくて見やすく、家庭科の授業のときに教室でこれを見て学習するのはいいと思うが、実習のときに、教科書を1冊持って行って、その場で使うには大き過ぎるのかなという感じもする。どちらも内容量が多くてとても楽しい家庭科の教科書だと思ったが、A者を推薦したいと思う。

教 育 長 加藤委員はいかがか。

加 藤 委 員 同じである。例えば、品質マークの呈示については、B者のほうは新しいものも皆取り入れてくれていて、見たことがないものもあるほど多い。A者のほうはむしろ少なく、逆に言えば、授業の中で「ほかにどんなものがある?」という投げ掛けができるのは、情報が少し限られていることによる効果と思う。「身の回りを振り返りましょう」という大きな視点を投げ掛けた後、そこから身の回りを実際に振り返ってみて、子どもたちが発見を持ち寄るという作業を取り入れていただくには、A者がいいかと思う。

一方で、B者が家族の大事さとか地域の大事さ、「そこにいるあなたは宝物」という言葉でメッセージを送ってくれている。そこにはとても打たれるものがあり、なか

なか捨てがたかったと思う。
教 育 長 委員の皆様方のご意見を伺うと、A者を推す意見が多かったので、総合的な観点からA者を候補としての採択ということによろしいか。

(異議なし)

それでは、家庭については、以上ご議論いただいた内容を採択理由として事務局に整理していただき、26日に最終的に決定したいと思う。

以上で令和2年度使用の仙台市立義務教育小学校教科用図書、小学校国語、書写、算数、家庭の採択についての協議を終了する。

次回7月18日には、同じように小学校教科書の理科、生活、図画工作、音楽の採択についての協議を行う。

次回18日の会議の会場は、仙台市役所上杉分庁舎12階会議室となるので、よろしくお願いする。

4 付 議 事 項

第15号議案 教職員の人事に関する事項について（教職員の人事異動について）

(教職員課長 説明)

原案のとおり決定

5 閉 会